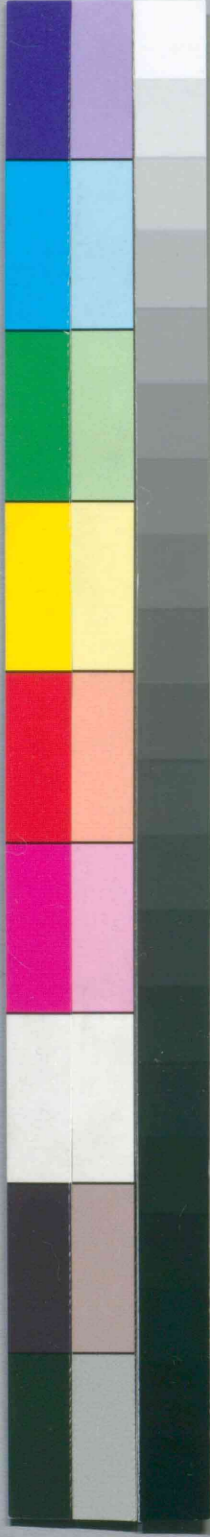


各郡
有志

小野善兵衛編輯
蠶業集談會筆記

全



K635
D67

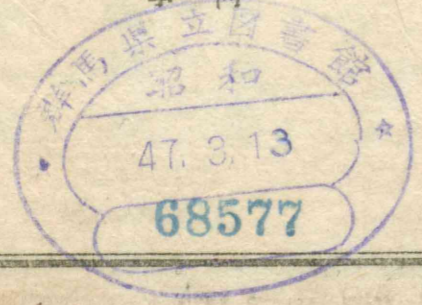
小野善兵衛編輯

各郡
養蠶業集談會筆記
奇志

上毛前橋 廣聞社印刷

問題

- 第一條 良繭ヲ得ルニハ何ヲ以テ緊要トスル歟
- 第二條 原種精粗鑒定ノ事
- 第三條 原種扱方ノ事
- 第四條 赤引小石丸得失如何
- 第五條 發蠶ノ氣候早晚ニヨリ得失如何
- 第六條 桑ヲ害スル虫ノ原因並豫防ノ事
- 第七條 蠶室ノ適否
- 第八條 養蠶器具ノ事
- 第九條 温暖育清涼育ト難易及利害得失如何
- 第十條 掃立方ノ事
- 第十一條 蠶病ノ主ナル原因及豫防ノ事
- 第十二條 引蠶ノ老若利害如何



第十三條 種繭育絲繭育養桑區別如何

第十四條 成繭後ノ手當如何

第十五條 原種製造及發蛾多少ノ事

第十六條 生絲類ヲ生スル原因

追加

寒暑凌方並害物ノ種類及豫防ノ事

蠶業集談會問題畢

群馬縣上野國東群馬郡前橋本町北裡第六号寄留

會長 加藤 義 質

發起人事務掛

群馬縣上野國利根郡月夜野町

小野 善兵衛

同 同 下津村

原澤 佐四郎

同 同 上津村

原澤 武一郎

杉木 彦七

發起人

群馬縣上野國利根郡下津村

内海彌平治

高橋八郎平

原澤萬次郎

高橋左求治

本木織吉

深津友次郎

飯塚惣平

狩野由次郎

赤見關次郎

原澤傳太郎

同 同 同

上津村

前原善一郎

高橋愛五郎

高橋儀平治

原澤安五郎

原澤市郎治

原澤五三治

高橋治郎平

高橋利平

林國吉

大川儀三郎

林甚三郎

林六郎平

高橋彌代吉

林金彌

高橋勝造

群馬縣上野國利根郡月夜野町

青柳國助

秋山平右衛門

原澤相馬

後閑隆之助

山田周之助

原澤竹十郎

杉木庄左衛門

青柳又五郎

杉木松之助

片野元良

後閑德之助

長野縣信濃國小縣郡築地村

倉澤金次郎

同 同 本海野村

矢島貞造

小林藤吉

矢島善造

會員姓名

長野縣小縣郡仁古田村	同	中村佐一郎	同	同	築地村	倉澤源作
同 吉田村	同	松井庄作	同	同	常盤村	官川新兵衛
同 同	同	西川泰吉	同	同	本海野村	土屋和作
同 上丸子村	同	工藤柳助	同	同	神畑村	松井美作
同 同	同	工藤治助	同	同	氷内郡長沼大町	松井郡司
同 同	同	工藤久吉	同	同	同	松井代太郎
同 同	同	工藤多三郎	同	同	埼玉縣賀美郡鷺村	八木兵四郎
同 同	同	工藤傳五郎	同	同	群馬縣西群馬郡青梨子村	松下政右衛門
同 同	同	工藤德太郎	同	同	同	佐藤晋平
同 同	同	馬場貞造	同	同	同	木槍仙太郎
同 同	同	馬場忠兵衛	同	同	同	梅澤要五郎
同 同	同	同	同	同	同	同

群馬縣吾妻郡須川町											梅澤喜平太	全	全	全	本多本作
全											見城 傅平	全	全	原町	山口 六平
全											高橋梅太郎	全	南勢多郡關根村	桑島謙太郎	
全											阿部仙太郎	全	全	桑島 留治	
全											原 貞次郎	全	岩神社	岡山歡太郎	
全											梅澤 量平	全	利根郡沼田町	小淵重右工門	
全											阿部藤太郎	全	全	朝倉 克邁	
全											見城 才吉	全	全	奥田 元資	
全											神保清十	全	全	小淵 半助	
全											森下 久吉	全	全	齊藤 新八	
全											森下彌壽吉	全	全	松浦勇太郎	
全											原澤 傳平	全	全	中島源兵衛	
全											本多源次郎	全	全	金子 常七	
西峯須川村															

岡谷村											小林安太郎	全	全	全	同 周司
全											大島 甚作	全	全	全	同 作次郎
全											赤井七郎兵衛	全	全	全	同 仙次郎
全											同 節之助	全	全	湯原村	鈴木治郎衛
全											戸部龜太郎	全	全	全	須藤 光三
全											石田 良助	全	全	川上村	宇津木雄太郎
全											左部 完十	全	全	全	中島近次郎
全											馬場 彌吉	全	全	石倉村	石坂利喜太郎
全											小野郷太郎	全	全	相俣村	阿部米太郎
全											櫛淵作右工門	全	全	今井村	今井 惣作
全											大塙 直吉	全	全	屋形原村	生方 仲造
全											田村 忠七	全	全	全	木檜九兵衛
全											小日向村	全	全	硯田村	進藤 庄平

全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全
高橋喜惣治	高橋甚五郎	同直衛	阿部茂吉	赤見嘉三郎	本木常吉	飯塚傳次郎	同武一郎	深津ツ子	前島キサ	林シカ					

群馬縣利根郡月夜野町ニ於テ蠶業集談會開設ノ記

明治十六年九月十六日午前十一時開會

會長加藤義質 本會開設ニ付派出ノ處發起者ノ依囑ニ因リ會長タル旨ヲ告ケ且云ク抑本會ノ旨趣タル昨十五年十一月桐生新町ニ於テ開設ノ集談會ト同ク蠶業上ノ意見ヲ互ニ陳述シ以テ知識ヲ交換スルニ在リ故ニ問題ニ就キ各自充分ノ意見ヲ述ルニ止リ苟モ討論駁議ニ及サルヲ要シ一問題ニ就テハ一人一回ノ陳述ニ止ムト雖モ尙一回前説ノ缺ヲ補フハ苦シカラスト

會員一同敬禮ヲ行ヒ引續キ左ノ祝辭ヲ提出ス依テ書記ヲシテ之ヲ朗讀セシム

民ハ國ノ本々固ケレハ國安シト斯ノ民ニシテ誰カ國是ヲ謀ラサラン今ヤ氣運隆盛ニシテ火輪陸ヲ走リ風船天ニ翔ル實ニ天外比隣ノ如シ此時

ニ當リ工ニ商ニ各々伎倆ヲ逞フシ以テ國恩ニ報セントス然ルニ我輩寡
區ノ一隅ニ僻在シ固ヨリ知識ニ乏ク何チ以テカ國ニ報セン本郡ノ如キ
管ニ山川草木ニ富ミ空氣朗明ニシテ農桑ニ適スルヲ以テ年來此業ニ從
事スト雖モ未タ其蘊奧ヲ極ルコト能ハス就中蠶業ニ至テハ最難シトス
故ニ各國諸賢養蠶ノ書ヲ編成スルヲ若干卷牛ニ汗シ棟ニ充ツ一々之ヲ
讀盡スニ暇アラス假令讀得テ諳記スト雖モ其實驗ニ至テハ當アリ失ア
リ多年ノ經驗ニアラサルヨリハ何ソ其實効ヲ奏スルヲ得ンヤ累年爰ニ
感アリテ曩ニ蠶業社ノ設アルモ一小社ノ理論ニ止リ其識見ノ狹隘ナル
未タ廣益ヲ謀ルニ足ラス爰ニ於テ二三ノ蠶業社學ヲ蠶業集談會ヲ開キ
廣ク知識ヲ求メントス幸ニシテ四方ノ諸賢遠キヲ厭ハス來テ以テ翼贊
ヲ得今日ノ盛會ニ至ル噫志ノ厚キ時事ニ切ナル所謂扶桑君子國ノ名モ
空シカラス此會ヲシテ蠶業ヲ盛ナラシメ以テ國富ミ家榮ヘ益強國ノ基
礎タルハ期シテ知ルヘキナリ我小子輩區々ノ微衷ヲ以テ此會ノ開設ヲ

詢リ今日ノ盛會ヲ見ル實ニ歡行雀躍ノ至リニ堪ヘス聊カ卑辭ヲ述ヘ臨
幸諸賢ノ厚志ヲ謝シ併テ以テ此會ノ祝辭トス

本會發起者一同謹白

祝詞

生等諸君ト一堂ノ下ニ相見ルヲ得ル實ニ幸ナリ諸君ハ實ニ衆人ノ望ヲ
負フ仁ナリ諸君ハ實ニ蠶業熱心ノ仁ナリ而シテ生等不肖ト雖モ亦諸君
ト同情同感諸君ノ驥尾ヲ攀ント欲スルモノニシテ今此堂下ニ於テ親ク
諸君ト相對シ各國各地ノ景況ヲ問ヒ且生等ノ卑見ヲ開陳スルヲ得ルハ
豈喜愉ナリト云ハサルヲ得ス故ニ生等不肖ヲ省ミス進テ一言ヲ陳ヘ聊
カ此會ヲ祝セントス
退テ按スルニ凡世界ノ人類ハ一個孤立ノ姓ヲ有チ以テ經營スルモノニ
非ス必スヤ相依リ相助ケテ以テ其生ヲ遂クル者ナリ郷ヲ爲シ國ヲ爲ス

是其証ノ一ニ非スヤ而シテ夫子ノ所謂三人往ケハ必ス我師アリトハ其意蓋シ知識交換ノ邊ニ在テ存スルモノナラム協同一致精神貫通ノ要ニ至テ欺ク可ラサルハ遠ク既往ノ史ヲ叩カサルモ近ク社界ノ現狀ニ見ルヲ得可シ請フ見ヨ社界今日ノ現狀農會ナリ商會ナリ其社ノ如何ヲ問ハス其人衆多ナレハ必スシモ其夥多人民ノ素志通達目的ヲ果サ、ル稀ナリ嗚呼孤立大業ヲ爲ス實ニ難シ之レ天性ニ逆ヘハナリ江河ノ溪水ニ於ケル泰山ノ土壤ニ於ル之ヲ分ツノ點ヨリ論スレハ泰山必シモ泰山ナラス江河必シモ江河ナラス然レモ之ニ反スレハ江河泰山ハ則テ江河泰山ナリ諸君果シテ何事ヲカ爲ス他ナシ甲地乙地ノ蠶業其現狀ヲ吐露シ蠶兒飼養ノ法桑樹培養ノ法其探ル可キハ之ヲ探リ其棄ツ可キハ速ニ廢シ互ニ胸襟ヲ開キ知識交換ヲ旨トシ以テ懇誼ヲ結ハントスルニ在リ是有志相謀リ茲ニ此會合ヲ設クル所以ナリ養蠶ノ實業ヲ探ルモノ親ク同盟シテ事ニ當ル矣其効果ヲシテ如何苟モ斯ノ如クナレハ斯ニ其衰頹ヲ欲

スルモ得可ラス生等斷シテ大言セン其事ノ盛大ノ致スヲ炳然タリト今此堂ニ會スルノ諸君ハ業ニ己ニ此事ヲ知ル矣又此事ニ熱心ナリ矣敢テ生等カ淺見ヲ贅スルヲ俟スト雖モ生等欣喜ノ情ハ禁ント欲シテ止ム能ハサレハナリ諸君ヨ諸君生等切ニ望ム此席ニ列スルノ諸君ハ向來互ニ其業ノ盛大ヲ謀リ共ニ期スルノ大目的ヲ成就シ全國衆人ノ望ニ當ラシテ實ニ明治十六年九月十六日ナリ

利根郡上津村吳桃蠶業會社惣代

原澤武一郎
頓首再拜
杉木彦七

祝養蠶集談會

諸士ヨ諸士ハ博達多識ノ仁ナリ又且蠶業ニ熱心ノ仁ナリ本日茲ニ養蠶集談會ノ舉アルニ當リ諸士ノ奮發微セハ奚ソ此盛大ヲ致スヲ得ン子亦

不肖ナリト難モ大ニ感テ同クスル所アリテ幸ニ此盛舉ニ與リ諸士ノ高
論卓議ヲ拜聽スルヲ得ル何ノ幸ソヤ豈一言ヲ陳シテ祝セサルヲ得ン
抑養蠶ノ我國特有物産ノ一ニシテ國家ニ廣利大益アルヲハ予輩ノ喋々
ヲ待タス諸士業ニ己ニ知ル所ナレハ予輩ハ啻ニ此會ノ今日ニ缺ク可ラ
サル所以ヲ陳シ以テ聊カ祝詞ニ換ヘ暫ク諸士ノ清耳ヲ汚サントス乞恕
焉

夫レ山海ハ高深ナリ然リト雖モ高深自ラ涯アリ吾人能ク之ヲ測知スル
ヲ得惟リ動物飼養ノ道ニ至テハ世人未メ之カ蘊奧ヲ極メシ者ナシ況テ
無血無聲ノ蠶虫ヲヤ今ヤ世運日ニ進ミ月ニ改リ學術農工何レヲ論セス
駁々乎トシテ大ニ体面ヲ改メ昨日ノ知者モ必ス今日ノ知者ニ非ス昨日
ノ良策好術モ必ス今日ノ良策好術ニ非ス彼ノ無血蟲飼養法ノ如キモ學
者ハ之ヲ書籍ニ照シ實物ニ問ヒ實業者ハ年來經驗ノ功ニ依リ以テ大ニ
其術ヲ窮盡スルニ似タルモ既往ノ改進ヲ見テ將來ノ改進ヲトスルニ足

矣誰カ之ヲ等閑ニ附シテ將來ノ改良ヲ希圖セサルモノアフランヤ之ヲ爲
ス如何同業者相依リ相翼ケ集議團結以テ之ヲ圖ルニ在リ之今日ニ此會
ノ欠ク可ラサル所以ナリ諸士此ニ見ルアリ乃チ身ヲ奮ヒ神ヲ勵マシ茲
ニ臨マシム我國蠶業ノ改進易々而已縱令伊佛ノ盛清亞ノ大ナルモ之ニ
凌駕スル何ソ難カラン請フ諸士共ニ之ヲ勉メヨ蓋シ藝術ノ蘊奧ハ深遠
ナリ山海ノ涯リアルカ如クナラス身死ヲ致スモ心ハ尙之ヲ研磨スルニ
留シ謹テ祝スルヲ然リ

岡山縣美作眞島

當時利根郡上津村在留

明治十六年九月十六日

山崎六三郎 再拜

養蠶集談會祝辭

憲法果シテ兵ヲ強フスルニ足ルカ國會果シテ國ヲ富スコ足ルカ決シテ

期ス可カラサル也如何トナレハ憲法國會何レモ國ノ貧富兵ノ強弱ニ依テ左右セラルモモノニシテ憲法若シ其全キヲ得サル時ハ却テ社會ノ害物トナリ國會若シ其國會タルヲ得サル時ハ却テ有司專制ニ如カサルノ嘆ナキ能ハス是レ單ニ憲法國會ノ頼ム可カラサル所以ナリ抑憲法ノ完全國會ノ無缺ヲ望マンニハ須ク國本ヲ培養セサル可カラス國本ヲ培養センニハ畢竟物産ヲ起シ人智ヲ研磨スルニ在リ蓋シ吾上毛ノ國タル養蠶精絲之レカ物産ノ首位ヲ領セリ故ニ其名內國ニ振フ否內國ニ止マラス海外ニ洽キ事己ニ各位ノ知ル所ナリ然リト雖モ未タ以テ其良果ヲ得ル能ハス而當地有志諸君此ニ見ル所アリ養蠶集談會ノ美舉アリ實ニ吾輩ノ大ニ贊成スル處ナリ是一ツハ人智ヲ研磨シ一ツハ物産ノ盛大ヲ計ルモノニシテ所謂國本ヲ培養スルモノニアラスヤ其結果タル他日必ス國會憲法上ニ顯ル、事又疑ヲ容レサル也依テ不肖ヲ願ミス陋見ヲ吐露シ以テ本會ヲ祝ス矣

駒形養蠶會社副社長

明治十六年九月十六日

木檜仙太郎 再拜

蠶業集談會祝辭

今回我同郡月夜野町ニ於テ開設セラル、蠶業集談會ハ已ニ明治十五年十一月本縣管下桐生新町同名會社高會ニ續ケル所ニシテ國產ヲ盛大ナラシムノ條緒萬々不可己ノ舉ナリ然リ而我邊境ニシテ此美舉アルハ何ノ幸ソ語ニ所謂天ノ時ハ地ノ利ニ如カス地ノ利ハ人ノ和ニ如カスト我郷蠶桑ニ利ナルハ固ヨリ幸ナリ隣里郷黨平素相和ス故ニ大方ニ續テ會議ヲ開キ諸君ノ經驗ヲ交換センヲ謀ラル、ハ又共同一體ノ幸ナリ其實業成效ヲ奏スルニ及ハ、必ス幸ヲ天時ニ倣メサルニ到ラン小生盛會ノ末ニ立テ指引ヲ預リ蒙ルハ幸ノ又幸ナリ仍テ聊カ祝辭ヲ呈ス其條件ノ如キハ宮崎氏筆記ニ略ホ之ヲ著ハセリ願クハ諸君其未完ヲ闡發シ譽

レテ大方ニ揚ケラレヨ

利根郡下川田村

深津平滿再拜

茲ニ蠶業集談會ノ發起諸君ハ夙ニ國家ノ經濟彙卵ト謂ツヘキ情態ヲ顯
 出シ其安全タラサルヲ憂ヒ興産ノ道ヲ盛大ナラシメ國産ヲ増殖シ榮ヲ
 同胞ニ全フセシメンコトヲ熟慮セラル豈美舉ト云サルヘケンヤ
 抑國家ノ經濟ヲ完備ナラシメント欲セハ我國産ノ第一タル生糸ノ改良
 蠶業ヲ獎勵シ以テ利益ヲ進取セサルヘカラス然リト雖モ一身ヨリ其事
 實ニ通曉シ業務ニ熟達セルモノハ甚タ少カラシ其レ言論ニ武キト雖モ
 實驗ニ疎ナルアリ經驗ニ富ムト雖モ言語ニ盡ス能ハサルアリ其思想ヲ
 交換セサレハ既ニ脩ムヘキノ利益ヲ脩ムル能ハス應ニ取ルヘキノ事物
 ヲ取ル能ハサルノ不幸ニ遭遇スルナキニ非ラサルナリ故ニ相集合レテ

智識ヲ交通シ以テ世益ヲ増進シ富國ノ基礎ヲ全備ナラシメ泰山ニ鼓腹
 センコトヲ冀望ス是卑志ヲ顧ミス此會ニ列スルノ榮ヲ得欣然トシテ止マ
 ス依テ祝賀ヲ表ス

明治十六年九月十六日

工藤徳太郎

農會無クンハ農業ヲ盛ニスルコト難シ學校無クンハ兒童ヲ教育スルコト能
 ハスト夫レ我上毛ノ國タルヤ扶桑國ノ一部分ニシテ何チカ國家ノ富饒
 ナ謀ラント欲ス其業何ソヤ他ナシ即蠶業是ナリ上毛ノ地素ヨリ養蠶ニ
 適スルヲ以テ蠶業ニ富ミ其事業ヲ擴張スルト雖モ未タ歐洲諸國ニ及ハ
 ス實ニ遺憾ノ至リナラスヤ苟モ富國殖産ニ志アル者一層奮發シテ以テ
 勉勵心ナクンハ有ヘカラス蠶桑ノ業弊習ヲ剝除シ改良ノ點ニ移轉シ益
 黽勉倦マスシテ其業ヲ盛ニスルキハ國家正ニ富饒ノ基本タルハ余カ言
 ナ俟タス期シテ知ルヘシ然ルニ近來盛世頻リニ博覽會共進會集談會等

ノ舉アリ故ニ見聞知識ヲ博フスルト雖モ其僻邑ノ婦女子ニ至テハ速ニ
往テ之ヲ觀ルヲ甚々稀ナリ就中コレヲ看得スル者アリト雖モ多クハ豪
家富人ニ過ス况ヤ因循姑息ノ野婦村婆ニ至テハ上古ヨリ家々ノ習慣ニ
固著シ之ヲ更ニ改良スルノ氣勢乏キヤ是此蠶業集談會無カル可カラ
サル所以ナリ語ニ曰ク玉琢カサレハ光ナシト信ナル哉爰ニ於テ一町ニ
當地方老若男女傍聽諸君ノ便宜ヲ計リ本郡月夜野町ニ開ク各地厚志ノ
諸賢遠キヲ厭ハス輻湊臨席ヲ得幸甚々々而シテ諸君多年ノ事能試驗至
誠ノ珍說ヲ見聞陳述ス即チ此會ニ列スル諸君ニハ士アリ農アリ工アリ
商アリ其内ニハ蠶種ノ製造家モアリ養蠶家モアリ製絲家モアリ各業ヲ
異ニスト雖モ諺ニ曰多ク聞テ疑シキヲ闕テ慎テ其餘リヲ言ヘハ尤寡シ
多ク見テ殆テ闕テ慎テ其餘リヲ行ヘハ悔寡シト宜ヘナル哉彼我ノ陳說
優劣ヲ比較シ該業進步ノ方法及利害得失ノ事實ヲ參考ニ供シ然リ而シ

テ競争活潑ノ氣象ヲ振起シテ以テ諸君ト共ニ余輩モ若干ノ裨益ヲ求ン
トス幸ニ普ク時勢ノ赴ク所ト諸君ノ盡力トニ因テ勇進鳩聚殆ント賛成
ヲ得即今親睦ノ盛會ニ至ル嗚呼厚志ナル哉曩キニ余輩等微志ヲ合セテ
以テ此會ノ開設ヲ催シ本日ノ盛會ニ及フ實ニ余輩ノ企望スル所歡喜望
外ノ至リニ堪ヘス因テ聊カ卑辭ヲ陳ヘ本會臨席諸賢ノ盛意ヲ謝シ併テ
以テ本會ノ祝辭トス

群馬縣上野國利根郡下津村

西利根蠶業會社々長

于時明治十六年九月十六日

原澤 佐四郎 謹白

今哉文運日ニ進ミ月ニ開ケ寒鄉僻邑ニ至ルマテ猶學舍ノ設アリ稚童字
ヲ講シ漁兒數ヲ話ス聖德ノ布及教化ノ隆盛古ヨリ未タ曾テ今日ノ如キ
アラサルナシ此時ニ當テ誰カ逸居安食シテ徒ニ子弟ノ笑ヒト爲ランヤ

故ヲ以テ農ニ商ニ各其職トスル所ノ者相會シ相話シ互ニ其職ノ蘊義ヲ究ント欲スルモノ天下ニ普シ矣今ヤ發起者諸君茲ニ見アリ蠶業集談會ヲ月夜對町ニ開設シ本月本日ヲ以テ開會ノ盛舉ヲ行ヒ四方ノ有志大ニ茲ニ臨マル乃チ知ル此會ノ將來ニ大利廣益アルヲ夫養蠶ニ從事スルハ猶草木ヲ培養スルカ如シ若シ其根ニ糞セサレハ草豈艷花ヲ開カンヤ木豈美實ヲ結ハンヤ故ニ蠶ヲ養フニ其道ナクンハ蠶業豈隆盛ニ至ランヤ其道ヲ知ル如何他ナシ此會則チ之ナリ噫此會ニ列スルノ諸君亦刻苦黽勉誓テ國家ヲ隆盛ニスル所以ヲ思ハサル可ラス幼少ノ童女ハ日ニ月ニ智藝ヲ加フ終ニ老少所ヲ異ニスルノ詆リナキヲ保セヌ故ニ互ニ其經驗スル所ヲ談シ其見聞スル所ヲ説キ智識ヲ交換シ藝術之捷路ヲ求メ以テ此會ノ實功ヲ奏センコト實ニ予カ願ナリ謹テ祝スト云爾

群馬縣上野國利根郡下津村

明治十六年九月十六日

原澤喜惣治

祝 辭

當蠶業集談會ハ我月夜野蠶業會社々長小野氏其他諸氏發起シ江湖ノ諸君ヲ招請シ開設セラル、所ナリ幸ニ諸君遠路ヲ意トセス來會シ年來實地ノ經驗ヲ以テ其利害得失先後緩急ヲ區別シ談論セラル何ソ其レ盛ナルヤ啻ニ本日ノ會盛ナルノミナラス固ヨリ發起諸君愛國ノ真情ニ出テ富國ノ基ヒテ洪ヒニシ江湖各位ノ經驗ヲ交換シテ人智ヲ開達シ國產ノ生殖ヲ増益シ且以テ物品ヲ精良ナラシメ本業ノ改良ヲ得ルヨリ人ヲシテ他ノ事業モ亦利弊アルヲ悟リ己ムヘカヲサルノ諸開化ニ向テ知ラシム此舉蓋シ一事ノ爲ニ衆善ノ集ル既クスニ勝ユ可カラサル者アリ生等欣喜拊舞スルモ猶足ラス仍テ微衷ヲ傾寫シ敢テ祝辭ヲ呈ス

群馬縣利根郡月夜野町

月夜野蠶業會社々員

明治十六年九月十六日

原澤茂作 敬白

會長祝詞終ルヲ見テ書記ナシテ第一問題ヲ朗讀セシム

第一條良繭ヲ得ルハ何ヲ以テ緊要トスル歟

倉澤金次郎 夫養蠶ハ我國第一ノ國産ニシテ萬國ヨリ利益ヲ取ルノ第一ナルカ故ニ只目前ノ利ニ著目セス精神ヲ盡シテ取扱ハサルヲ得ス故ニ取扱方第一ニ原種ヲ玩味シ桑質ヲ撰ミ之ニ亞キ尙及フ丈ハ蠶室器具等ニ至ル迄注意改良セハ可ナラン

工藤柳助 倉澤氏ト大同小違ナレ共良繭ヲ得ルニハ飼養法始終ニ至ル迄誤ラサルヲ尤モ緊要トス次ニ蠶種ヲ撰ムヘシ何トナレハ飼養法ヲ誤ルトキハ如何ナル良種ヲ掃立ルモ其成功ナカルヘシ第三ニ桑葉ヲ撰ムヘシ桑ハ蠶蟲ノ食物ナリ成ヘク精撰シダシト雖モ良種ヲ掃立飼養法届クトキハ桑質惡シト雖モ必ス成繭スヘシ先ツ有脊髓體ヲシテ譬フルニ則チ人ハ美食ヲ嗜フト雖モ動作宜キヲ得サレハ健康ニシテ且ツ自ラ精力ヲ得ルヲ能ハス此理ヲ推考スルニ蟲類ト雖飼養法ヲ以テ專要トシ是ニ

次ニ良種ヲ以テシ且良桑葉ヲ與フレハ必ス良繭ヲ得ルモノト思惟ス

桑島謙太郎 本題ハ既ニ原種モ有扱人モアリ桑葉モ有テ只何ヲ以テ第一緊要トスル歟ノ意ナラン依テ愚考スレハ要スルモノ凡四アリ第一位ハ家内ノ和合之ナリ第二ハ扱法ナリ第三ハ原種ナリ第四ハ養桑ナリ第一トスル家内ノ和合タルハ養蠶ノ業ノミニ非ス何事ニモ第一位ノ根基ナリ故ニ其至要ナルハ諸君ノ普ク了知セラレ、所ナルヲ以テ敢テ喋々セス他ノ三要中ヲ以テ先後ヲ論セハ第一扱ナリ今其扱ノ緊要ナルニ付テ一証ヲ述ン今ヨリ數十年前迄ハ青引ト云蠶ナカリシニ伊豫郡掛田ノ人大橋ナル者十有餘年ノ久キ扱ヲ經テ漸ク赤引中ヨリ此種ヲ變出セシメタリト云今普ク世間ニアルモノ之ナリ而シテ見ルニ赤引中ニ青引ニ似タル者アリ青引ニシテ赤引ニ類スルモノ無キ能ハスト雖モ全ク二種相異ナルニ至ル嗚呼扱ノ如何ニ依テ遂ニ赤質モ變シテ青質トナル豈夫扱其宜キヲ得ハ譬へ原種ハ粗惡ナリト雖モ之ヲ善良最美ノ品ニ進ムル

モ易キヲナルヘシ併シ之ハ幾年ノ星霜ヲ經ルニアラサレハ難キノミナ
ラス能ハサルモノナルヘシ故ニ急ニ良品ヲ求メントナラハ原種ヲ改良
スルニアリト雖モ此原種ヲ改良スルモ扱ノ功拙如何ニ依テ或ハ元巢ニ
優ルモノトナリ或ハ劣ルモノト變シ甚シキニ至テハ遂ニ飼育者ヲシテ
我ニ非ルナリ年ナリト云テ意ニ悲哀セシムルニ至ルヲ有リ故ニ扱ハ最
モ緊要ニシテ先トシ原種ヲ次ニスル所以ナリ扱ト原種全キ時ハ譬ヘ桑
葉ノ盛不盛アル幾分ノ糸量等ニ關セサルニアラスト雖モ扱ヒ及ヒ原種
ニ缺點ナキ時ハ其害ヲ知ラサルモノ、如シ故ニ之ヲ扱ト原種トノ次ニ
置ク所以ナリ以上論スル處ヲ略言スレハ家内互ニ愛テ以テ働キ注意シ
テ養虫セハ良繭ヲ得ヘシト云フニ過キス

松下政右衛門 此問題ニ就テ一言センニ第一ノ緊要ナルモノハ養蠶家自
ラノ熱心ニ在リ第二ニ種ノ良否ニ關スルモノナレハ熱心ニ撰種スルヲ
緊要ナリ而シテ其扱方ハ熱心ニ依テ如何ニモナルモノニテ先ツ第一ノ注

意ハ眠起ノ際ニ在リ故ニ眠ニ就カシムルニハ成丈ケ段數ノ分カル、ヲ
厭ハス能ク休マス可シ熟蠶揚場ハ風入静ナル所ニ限ル且ツ常ニ風ヲ入
ル、時等ハ其風ノ向ニ反スル所ヲ開テ流通ヲヨクス可シ是取扱方中最
緊要ナル所ナリ

桑島謙太郎 原種ヲ撰ムハ勿論ナレ共本員ハ扱方ヲ第一トス前已ニ陳セ
シ如ク一種ノ虫ヨリ種々他種ノモノヲ生スルハ則チ年一年ニ其扱方ヲ
丁寧ニシテ之ヲ得ルニアラスヤ彼青引ノ如キモ初ヨリ之有ルニアラス
赤質ヨリ之ヲ得シ如ク其良品ヲ得ルハ必ス扱方ニアルモノナリ即前説
ノ餘意ヲ述フ尙一言セン彼ノ伊國ノ如キ其名元ヨリ世界ニ冠タルノ土
地モ其繭ト種トヲ見レハ實ニ驚クニ堪ヘタリ然ルニ其種ヲ以テ我國之
ヲ飼養セハ又驚ク可キ良繭ヲ得ルハ諸君己ニ知ル所ナラン是其証ノ一
ナリ

山崎六三郎 小生ハ學ナクオナク經驗ナク只此席ニ於テ諸君ノ御名論ヲ

拜聽セント欲スルモノナルカ又聊カ其見聞セシ説ヲ陳ヘン乞フ諸士豫
メ之ヲ了セヨ此第一問題ニ於テハ實ニ桑島氏ノ説ニ最モ同意ナリ然シ
テ其虫類ノ變遷ニ至テハ聊其意ヲ附演スヘシ凡我住居スル所ノ無機無
生ノ地球スラ年々歳々變遷シテ未タ寸時間モ止ム時ナシ况テ有機生活
スル所ノ虫類ヲヤ理ニ於テ且ツ然リ然ラハ年々歳々之カ手富テ充分ニ
シテ以テ之ヲ改良スル何ソ難カラン故ニ其家内和合ヲ第一トシ而シテ
扱方ノ初テ行届テ得原種養桑之ニ次ケハ可ナラント信ス

岡山歡太郎 良繭ヲ得ント欲セハ先ツ第一ニ飼養ニ注意スヘキナリ原種
桑質ノ關係之ニ亞ク何トナレハ如何ナル良種良桑ヲ以テスルモ飼養法
ノ惡シキハ良繭ヲ得ルヲ難キハ諸君能ク經驗上ニ於テ知ル可キナリ
今世ニ黃繭アリ白繭アリ大巢アリ中巢アリ小巢アルモ古ハ惟一ノ繭即
チ黃繭ノミナリシト聞ケリ之何ニ因テ此ノ如ク異ナル皆飼養ノ一點ニ
止ル可キナリ故ニ飼養ヲ第一トス然レモ原種桑質モ亦實ニ緊要ナルヘ

シ故ニ飼養ヲ第一トスト雖モ此三ツノ者満足シテ始テ良繭ヲ得ヘキナ

原定次郎 生ノ考ニテハ養桑ヲ第一トス如何トナレハ良キ桑ニハ膠質ヲ
含ムヲ多ケレハナリ絲ハ此質ヨリ生スル故桑ヲ撰ムヲ第一トスルナリ
工藤傳五郎 余輩ハ素ヨリ飼養方ヲ以テ第一トセラレタル桑島氏ノ説ニ
同意ノ者ナリト雖モ他ニ反對者無之ハ果シテ桑島氏ノ意滿場諸君ニ貫
徹セシ者ト想像セシ故徒ニ贅言ヲ要セサリシニ然ルニ豈計ラシヤ桑葉
培養ヲ以テ第一トスルトノ論者アレハ果シテ當場ニ右等ノ諸君ナキヲ
保シカタシ就テハ黙止スルニ忍ヒス今ヤ桑島氏ノ説ニ賛成ノ意ヲ表サ
ントス抑宇宙間ニ生活スル動物有脊椎体有節体トモニ習慣性ヲ有スル
ハ理學的ノ原則ナリ實ニ今日此良繭ヲ得ルモ偶然ニアラス信濃上野ノ
如キハ今ヲ去ル二百有餘年ノ前ハ單ニ真綿ヲ製スルニ適スルノ繭ノミ
ト然ルニ今日此良繭ヲ得ルハ果シテ何等ノ原由ナルヤ是其辨解容易ナ

ルヘシ成繭數顆ノ内ヨリ良繭ヲ選拔シ之ヲ以テ原種ヲ製スルヲ數年ニシテ良繭ヲ得タルヨリ外ナカルヘシ此皆習慣性ノ茲ニ傾向シタルモノナリ然レトモ此宜キニ傾向スルヤ飼養法其宜キヲ得スニハ何ソ此好結果ヲ見シヤ之ニ依テ見ルニ飼養法ヲ以テ第一原種ヲ以テ第二桑樹培養ヲ以テ第三トスルヤ明ナリ因テ聊カ卑見ヲ述テ桑島氏ノ意ヲ贊成ス

深津友次郎 飼養法ヲ第一トス元來種ヲ撰ムヲ甚タ困難ニシテ縱令高價ノ種タリトモ必ス良キモノト云ニアラス飼養サヘ届カハ必ス種モヨカ
ルヘシ因テ飼養ニ念ヲ不劣繭ヲ取樣ニシタシ故ニ飼養ハ第一ナリ
會長加藤義質 第一ノ問題論旨モ盡タリト認ム暫時休息スヘシト時ニ午後二時三十分

午後三時着席書記ヲシテ第二條問題ヲ朗讀セシム

第二條原種ノ精粗鑒定ノ事

松下政右衛門 種ヲ鑒定スルニハ掌ニテ摺リ試ミテコボレヌ程ノリノ強

キヲ良トス種ノ付キ方薄ク共目方ノアルヲ精撰トス

倉澤金次郎 第一ハ種ヲ一覽ノ際光澤ノ晴レタルヲ以テ一等トス如何トナレハ蠶兒養立ノ際空氣ノ流通蠶室等モ適應スルヲ以テノ故ニ光澤ノ晴ル、モノナレハナリ第二ハ蠶種ノ糊力ノ強ヲ以テ良トス如何トナレハ桑ノ培養法ノ届キタルモノヲ以テ飼養スルキハ必ス卵種ニ糊強ク瘡セタル桑圃ノ桑ヲ以テ飼養シ且注意不屈種ハ糊弱クシテ紙ヨリ落ルモノナレハナリ第三ハ原種平ナルヲ以テ一等トス如何トナレハ飼養ノ際注意ノ届タル蠶ノ強蟻ヲ以テ製造スレハ必ス平ニ弱蟻ヲ以テ製造スレハ不同ニシテ或ハ粒々相重リ或ハ間隙ヲ生シ且横ニ産附スルモノナレハナリ右ノ所ニ克々著目セハ可ナリ

深津友次郎 土地ニヨリ注意ニモヨリ其精粗アルモノナレ共種商人ノ名義ヲ買ハスシテ精神ヲ買ハサレハ所詮鑒定ハ確ト致シ難キモノナリ
山崎六三郎 此事ハ至テ困難ニシテ種ノ付キハ横ニ生ムアリ豎ニ生ムアリ

リ重ナリ合テ生ムアリ實ニ其見分ケニ苦ムモ先ツ光澤アリテ平ニ付キ
シ糊ノ強キヲ第一トス

工藤傳五郎 山崎君ハ平ニ生付キタルヲ上等ト述ヘラレタルモ一ハ養桑
ニアリ一ハ蠶室ニアリ十分ニ空氣流通セサレハ蠶種ニ冴ナシ故ニ充分
扱ヒシモノニア空氣流通ノ宜シキ蠶室ニテ採リシモノヲ第一トス

工藤柳助 蠶種鑒定法ハ甚タ難キヲニシテ一概ニ論シカダシ小生ニハ成
繭スル種ト違蠶スル種トヲ鑒別スルヲ能ハス凡其良否ヲ視察スルト雖
モ其成繭シタル蠶ノ質ヲ鑒スルト云フハ恰モ人ノ容貌ヲ見テ其量ヲ知
ラント欲スルカ如シ是實際ノ度ハ測ラレサル所以ナリ故ニ倘シ齟齬ス
ル中ニ至リテ大ナル障害ヲ醸スヲナカラシヤ然ルモハ經濟ニ影響スル
ヲアルヘシ然リト雖モ若シ鑒別ヲ逐クルモノアラハ其人ヲシテ鑒定セ
シムルモ宜シ併シ過言ナカラ我上田地方ニ於テハ日今鑒定ニ適當ノ人
アラサルト想像ス

桑島謙太郎 蠶卵紙ノ善惡良否精不精ヲ大略ニ鑒定スル迄ニシテ虫勢如
何結果ノ可否等ヲ斷言スルハ本員等ノ能ハサル處ナリ恐ラクハ未タ天
下ニ其人少カルヘシ故ニ本員ハ其卵紙ノ景面ト數粒ノ見本繭位ニテ殆
ト一家糊口ノ半ヲ補ハントスル貴重ノ原種ヲ安然トシテ未タ曾テ知ラ
サル地方ニ求ムル能ハサルナリ若シ勢ヒ求メサルヘカラサル時ハ親ク
其地ニ到リ飼養ノ法方ヨリ虫勢ノ如何種繭鑒別等ニ至ル迄實見シテ是
トスルモノニアラサレハ求メス是トスルモノヲ求ムルヲ可トス或人言
アリ種ヲ買フヨリ人ヲ買ヘト然レトモ世間買フニ其人ナキニ非ルモ至
テ乏シトス故ニ成ルヘクハ其種ヲ信州ニ奥州ニ求ムルヨリ寧ロ之ヲ上
州ハ上州ノ中ニ求ムルヲ可トスルモ尙望ムラクハ其郡中或ハ其村内ノ
慥カナル者ヨリ求ムルコソ實ニ安心ナルヲナレ尙本題ニ就テハ蠶種ヲ
專ニスル諸君モ見ユレハ從テ御名説モ多ク有ルヲ信シ黃齋ヲ爰ニ閉ツ
工藤柳助 前説ニ申セシ如ク諸國ニ於テ種ノ善惡慥ニ鑒定シタルモノ之

ヲ聞カス到底及ハサルコト想像ス因テ本員ハ此問題ハ削除シタキ位ナ

桑島留吉 精粗ノ鑒定實ニ難シ謙太郎氏ノ説ヲ賛成ス淡薄ノ地へ植付タ

桑ニ肥料ヲ充分ニシタルヲ與ヘ種ノ生付方ハ渦卷ノ如クナルヲ上品ト

工藤徳太郎 種ニ見惡キモ見ヨキモアリ見惡キトテ決シテ惡種トナス可
ラス其原繭精撰ナレハ宜シ

深津友次郎 諸君ノ説ノ通りナレ共種ノ色形チハ其地方ニ因テ替ルヘシ
何國ノ種善惡ノ別ハ付ケ難シ性分強蛾ヲ用ユレハ必ス見場宜シキモノ
ナリ

岡山歡太郎 種ノ鑒定ハ實ニ困難ナルモノナリ我々如キ若輩ニハ判然シ
難シト雖モ大概種ハ紙ニピツシヤリ付キ種ト種トノ間隙寡ク糊強ク光
澤ノヨキヲ先第一トス

會長加藤義質 第二條問題論旨盡タリト認ム因テ第三條問題ヲ朗讀セシ

第二條原種扱方ノ事

深津友次郎 桑葉ノ青キ間ハ空氣流通ノ宜キ所ニ置クヘシ元ト蠶種モ落

葉ノ頃ニ至テハ眠ル氣味アルヲ以テ箱ニ入置クモ宜シ春ニ至リ桑葉發
芽ノ頃ハ清潔ノ場ニ出シ置クヲ可トス

桑島謙太郎 生ノ考ニテハ生マノ内ハ種屋ニ預ケ置キ持參スレハ濕氣ノ
ナキ所ニ仕舞置クヘシ寒中水ニ入ルハ近來流行ナレ共格別益ナシ牡丹
躑躅ノ花咲ク頃箱ヨリ出シ桑葉發芽ノ頃ヲ量リ七八日前箱ヨリ出スヘ
シ其時節寒暖不同ノ氣候アル故意外ノ害ヲ生スルコト有モノナレハ一室
内立籠ノ置キ華ニ寒暖計七十五度位ニ致シ置ケハ一週間位ニテ必ス蠶
兒發生スルモノナリ乾クハ如何程乾キテモ苦シカラス濕氣ハ厭フヘシ
又種ヲ遠路ニ送ルニハ成丈ケ遅キヲカトス

原定次郎 取置キ方ハ諸君ノ論スル如クナレモ發生前ニ至テハ生ハ桑葉發芽ノ様子ヲ見ルヲ第一トス原種ヲ發生迄掛置クモノハ一室内ヲ立籠メ置クヘシ若シ發生ノ後レタルキハ障子ヨリ六尺程隔テ置キ陽氣ヲ受サスヘシ或ハ炭火ヲ用ユルモ宜シ先ツ桑ノ様子ヲ見ルヲ第一トス

木檜仙太郎 生儀ハ未タ充分ノ經驗ナキカ故只其聞タルコトニテ可ト思惟スル所ヲ述ヘン叔富國吾妻郡中ノ條町田儀平ナル者實地經驗シタリトテ種ヲ永ク仕舞置ク扱方ヲ聞クニ先ツ松板ヲ以テ四尺四方ノ箱ヲ作り其中ヘ少ク小キ「ブリキ」ノ箱ヲ入レ其間ヘ鋸屑ヲ詰メ又其中「エ」ブリキ」ノ箱ヲ入其間ニハ砂ヲ詰メ種紙ヲ丸ク卷キテタテ措キ其間ヲ小豆ニテ詰メ能ク口ヲ閉置クヘシ斯ノ如クスルキハ春蠶ヲ夏飼ニモ秋飼ニモナシ得ルナリ且來年常蠶發生ノ頃迄モ貯ヘ置ケルナリト同氏ノ說ニ因リ諸君參考迄ニ陳述ス

桑島謙太郎 只今木檜君ノ述ヘラレシ所ハ尤モノ様ナレ共聊了解シ難キ

所アリ彼ノ「ブリキ」ノ箱ヲ造リ之ヲ密閉スルニハ或ハハンダヲ以テ造ルナルヘシ之甚ダ宜シカラス寧ロ發生ヲ遅クセンニハ山中寒キ所ヘ預ケ置クヲ宜シトス

工藤徳太郎 前說ノ通りナレモ其年ノ氣候ニヨルヘシ

木檜仙太郎 通常發生サスルニハ入ラヌコトナレ共前說貯ヘ置ク如キハ非

常ニ備フルモノニシテ或ハ霜患アルトキ等ノ豫備法ナリ

松下政右衛門 箱ニ入レ貯フルモ宜シカルヘケレ共空氣ノ流通ヲ止ムレハ必ス害アルヘシ因テ山中等ヘ預ケ置クヲ良トス

杉木彦七 木檜君桑島君ノ意ニ付テ考フレハ本年實効ヲ見シ所ヲ云フヘシ昨年中經驗ノ爲メ夏蠶赤引鬼縮ノ三種ヲ原種六枚石室ニ入レ置キ本年六月廿六日取出シ我吳桃蠶業會社々中熱心ナル者六名ニ分配シ試ルニ惣テ赤引ハ虫弱クシテ追々ニ倒レ或ハ充分ニ熟蠶シタルモ縮ミテ繭ヲ成スモノ更ニナシ鬼縮ハ幾分カ強クシテ聊繭ヲナシ夏蠶ハ不殘繭ヲ

成シタリサスレハ春蠶ヲ夏秋等ニ送ルナト、云フフハ惡シカルヘシ如
何トナレハ氣候ニ反對スレハナリ最「カナス」則チ掛合セノ類夏秋ノ蠶
ニスルハ可ナリト想像ス

小淵重右衛門 生マノ内ハ製造人ニ預ケ置キ既ニ持來レハ寒中迄濕乾少
キ所ニ貯フヘシ當地ニテハ八十八夜頃ニ取出シ發生後ル、ト見レハ火
力ヲ用コルモ宜シ萬一後レサセンニハ桑島君ノ説ノ如ク山中ヘ預ケ置
クヲ宜トス

會長加藤義質 論旨モ盡タリト認ム因テ第四條問題ヲ朗讀セシム

第四條赤引小石丸得失如何

工藤傳五郎 我輩ハ詳細ノ實驗ヲ遂ケタル者ニアラサレハ確乎タル論辨
致シ難シ只自ラ五六年間經驗スル所ト我上田地方ヨリ各國ニ出タル蠶
種商人カ諸國ノ狀況ヲ辨スル所ヲ以テ聊カ感スル所アリ由テ本題ニ付
卑見ヲ述ヘン赤引小石丸何レモ一得一失アリ然レトモ短チ棄テ長チ採

ラントスルニ三項ノ比例ニ依テ得失ヲ定メントス第一由ノ強弱ヲ見ル
ニ平年ニ在テハ敢テ著シキ差ヲ知ラサルモノ、如キモ僅ニ氣候不順ニ
際會スルキハ小石丸ハ未タ之ヲ感セサルニ赤引ノ如キハ乍チ病蠶トナ
ルヲ各地ノ實況ニ依テ明カナリ第二赤引ハ絲口太クシテ且赤色ヲ帶ル
カ故ニ精良ノ絲ヲ製スルヲ能ハサルナリ茲ニ壹顆ヲ以テ經驗スル處ヲ述
ヘンニ小石丸赤引共ニ六百回ナルキハ赤引ノ小石丸ヨリ「テニール」ノ
多キヲ半カ又ハ壹位ノ差ハ必ス有是ニテ絲口ノ太キヲ明カナリ之ニ因
テ此ヲ見ルニ赤引ハ未タ小石丸ニ及バサルヤ確乎動カスヘカラス第三
桑量ノ比較小石丸赤引共壹葉ノ原種ニ需用額ヲ見ルニ詳細ノ調ハ未盡
且聊カ經驗スルヲアルモ今茲ニ記憶ニ存セサレハ悉ク辨スルヲ能ハス
ト雖モ豫メ之ヲ見ルニ赤引ノ小石丸ヨリ桑ノ多量ヲ要スルヲ實ニ何十
貫ト云フヘシ尤モ桑ノ多量ヲ要スレハ則チ其收穫多シ收穫多ケレハ桑
葉ノ需用多シ是レ桑ハ大氣中ノ有機物ヲ吸集シテ此カ蠶ノ喰フ所トナ

レハ皆此桑量ニ從テ取獲ノ多寡ヲ生スモノナリ然ラハ取獲多キモ亦桑量多キモ取テ得失ヲ辨スル所ナキカ右論シ來レハ養蠶ノ術ヲ得サルノ地方ヨシテ此柔弱ナル性質且上絲ヲ製シ得サル赤引ヲ養ハシムルモ實ニ益ナキノミカ却テ損害ヲ招クノ基ト云フヘシ之レ我輩カ小石丸ヲ探テ赤引ヲ探ラサル所以ナリ

木曾仙太郎 前説ノ如シ壹舛ニテ試レハ赤引ノ方絲目多量アレ共多數ニ至テハ小石丸ニ如カス揚ル時モ小石丸ハ打桑ニテモ宜シ赤引ハ不殘拾ヒ揚ケニ致サテハナラス是常人ノ爲シ能ハサル所且赤引ハ桑モ多ク食ヒ小石丸ハ虫強キ故少々ノ氣侯不順ニモ感セサルナリ又桑モ少量ナレハ小石丸ヲ宜トス

桑島謙太郎ノ演説アレモ印刷ノ都合ニ因リ末尾ニ送ル

深津友次郎 小石丸ヲ宜シトス或製造家ニテ諸種ノ虫ヲ干シ殺シ試シニ赤引先ニ死シ次ニ青引次ニ白ノ中巢次ニ小石丸次ニ青白ノ順序ナリ然

ハ赤引虫弱クシテ飼惡シ故ニ熟練家ノ外ハ漸次收穫モ少キ故小石丸ヲ良トス

今井惣作 赤引ハ必ス利得アリ昨十五年小生實驗致セシニ原種ニ改赤引ヲ飼養シ成繭二石五斗ヲ得又原種二枚小石丸ヲ飼養シ成繭一石九斗ヲ得乾燥ノ後試ルニ赤引繭二石五斗ハ拾五貫目アリ小石丸一石九斗ハ八貫五百目アリ然ラハ則チ赤引ノ得ナルヲ右ノ如シ然ルニ或會員ハ小石丸ニ得アリト云説モアリ又赤引ハ虫勢弱キ故ニ小石丸ヲ以テ飼養スル時ハ當リ近キナト、陳ラレシモ是ハ果シテ不勉強ノ者ノ説ナリト想像ス

松下政右衛門 此問題ニ付小生幸ニ本年二種飼ヒ競ヘタルヲ以テ聊カ陳スヘシ先ツ原紙一枚ノ正種目方九匁此發蠶ノ目方ハ四匁五分凡頭數四萬五千位ト見ル籠割ハ掃オロシ(横ニ尺縱六尺ニシテ)一籠紙抜トリ後二籠初眠四籠ニテ眠ラセ起テ裏テ去リ後六籠半バニ八籠二眠ハ十二籠

ニテ眠ラセ起裏ヲ去リ十六籠ニシ半ハニ二十貳籠ニシニ眠ハ二十八籠
ニ眠ラセ起裏ヲ去リ三拾貳籠ニシナカバニ二十六籠四眠ニ四十籠ニ
眠セ起裏ヲ去リ四十六籠ニ置ク○桑目方ハ大概掃オロシヨリ紙抜キ迄
一籠ニ付一回廿匁與ヘ二籠ニシテ後廿五匁一籠ニ付一回ノ分量ハ之ヨ
リ初眠迄右ノ同日初眠起三十匁ツ、與ヘ中程ヨリ二眠迄三十五匁二眠
起々裏ヲ去テヨリ四十匁中程ヨリ三眠迄四十五匁是迄ノ給桑度數ハ晝
夜ニテ七八度三眠起々裏ヲ去テ後三日間六十五匁其ヨリ四眠迄八十匁
此後ハ蠶ノ桑ヲ喰ヒキルカ喰ヒキラサルヲ限リニ給桑ス寒暖ハ大抵華
氏六十五度ヨリ七十五度迄位ヲ計リ置タリ然レ共氣候ニヨリ此限ニア
ラス右ノ如ク爲シ來リ發蠶ヨリ熟蠶迄小白丸ハ三十八日赤引ハ四十日
ヲ費シ桑量ハ小石丸ハ二百廿五匁赤引ハ二百六十匁小石丸收獲舂目一
石一斗五舂赤引ハ一石四斗五舂目ハ小石丸十八匁赤引廿三匁ナレハ
赤引ニ利アルモノト想像ス併シ迂生タケノ經檢ナレハ諸先生方ノ名說

ヲ仰カン

木村政太郎 本員モ赤引ヲ以テ利得ナルモノト信ス何トナレハ繭ノ大小
ヲ以テ之ヲ知ルニ足ルヘシ併シ赤引ト小石丸トハ飼養上ニ付大ニ難易
有テ赤引ハ小石丸ニ比スレハ蠶兒柔弱ニシテ飼養尤モ難ク養法ニ熟練
ノ者ニ非レハ好結果ヲ得ルヲ遠シ故ニ不熟練ノ者ハ小石丸ヲ養フヲ以
テ利トナスヘシ然リト雖モ方今年一年ニ蠶業ノ精良ヲ希企スルノ時ナ
レハ百敗不屈ノ精神ヲ以テ益改良ノ道ヲ研究セサルヘカラス故ニ赤引
ヲ養フヲ可トス

原澤萬次郎 小生思フニ小石丸ノ便益ナルヲハ第一寒暑ノ害モ少ク蠶兒
ハ強ナルハ赤引ヨリモ大ニ勝レリ尙實地飼養法ノ巧拙ニ係ハラス手數
養桑ノ量迄赤引ヨリハ何分カノ減少有可シ又賣買ノ利益ヲ見レハ外種
類ヨリモ于揚ケ目方ノ減少ヲ見ルヲ少シ實ニ官立富岡製絲場其他ノ製
絲場ニ至ル迄赤引ヨリモ高價ヲ以テ買入ル、ニ付捌方ノ宜シキハ實ニ

養蠶家ノ知ル所ナリ然ルニヨリ北勢多利根郡地方ニテハ近來小石丸ヲ多分ニ飼養シ且ツ年々上作スルヲ見ル之ヲ以テ小石丸ハ赤引ニ勝ルトナス

須藤光三 生ハ學識モナク經驗モナケレハ嘗諸君ノ論スル所ニ依テ考按テ下ス可シ夫諸君ノ論スル所ニ依レハ赤引ノ功タルヤ桑ヲ喰ムコト多ク從テ成繭ノ量モ多シト而シテ其虫勢タルヤ弱ニシテ且寛ナリ然ラハ飼養法ノ難キコト知可シ併シナカラ之カ飼養法ニ熟練シタル養蠶家ナラシメハ何ソ憂フル處有ラン彼ノ有名ナル丹治梅吉氏ハ今年ハ氣侯不順ニシテ頗ル困難ヲ極メシモ尙常年ニ超ヘテ良繭ヲ得タリト云フ然ラハ能ク飼養法熟練スレハ如何ナル氣侯ノ不順ヲ來スモ更ニ憂ナシ如何セン丹治氏ノ如キ練達者ハ十カ一二ニ居レリ然ラハ未タ飼養法ニ熟練セサル者ナシテ養シムルハ必ス失敗スルモノナラン依テ考レハ此クノ如キモノニハ蟲勢強ニシテ且敏ナル所ノ小石丸ヲ飼養セシムレハ過チナシ

熟練家ニハ赤引ニ得アリ不熟練家ニハ小石丸ヲ利ナリト想像ス

倉澤金次郎 小生カ想像スル所ハ小石丸ニ利アリトス如何トナレハ小石丸ハ大繭少ク絲ノ光澤善ク飼養ノ日數少ク且養桑モ隨テ少ク虫強クン寒暖ニ弱ラス故ニ不注意ノ者ニモ利アリ赤引ハ一粒ヲ以テ經驗スル時ハ丈長ク「テニール」多ク糸口太ク且巢大クサスレハ石數ハ多ケレ共亦大繭アリ生絲ニ製ス時ハ大繭ハ除ク者ナリ左スレハ小石丸ト同量トナルヘシ且光澤曇リ日數諸費等モ多ケレハ當今迄ノ實行ヲ見ルニ赤引ニハ利ナク小石丸ニ得アル可シト想像ス

杉木彦七 得失兩三年試ルニ赤引ニ利アリト認ム諸方ノ蠶種ヲ取入レ委ク經驗セシニ都テ赤引蠶飼養易シ最モ長野地方ノ製造家ノ説ニ依レハ赤引ハ別シテ飼養惡キト云説多シ果シテ其言ノ如ク長野地方ノ産種ハ都テ飼ヒ惡キ所アリ之ニ反シテ福地地方ノ種ハ都テ飼養シ易シ恰モ青白蠶ヲ養フニ等シ尤モ四眠後小石丸ヨリ一日半モ日數ヲ多分ニ費スモ

桑葉其割合ニ入ラスヨシヤ多分ニ食スルモ他ノ動物ト異ナリ成繭ノ際
顯然タリ且ツ收穫多分隨テ金額モ餘計ナリ加フルニ改正舛一斗ニテ其
人飼畜ノ小石丸赤引ノ比較(即チ本年中ノ成繭ナリ)金壹圓ノ差アリ是則チ當吳桃西
利根兩社中ニ儘アル處ナリ之ニ「ア」テ之ヲ觀レハ赤引ノ右ニ出ルモノナ
シ因テ弊社ニテハ小石丸ヲ廢シ赤引一品ニスルモノ多シ又生ノ製造ノ
赤引種類ヲ社中及ヒ近傍親族共ニ分配シ一昨年ヨリ試ルニ都テ飼養シ
易シト云フ尤モ地方ニ依ルカ赤引ニ限ルト云フハ社中五拾餘名兩三年
ノ經驗ニ因テナリ

桑島謙太郎 原澤萬次郎君ノ說ニヨレハ富岡ニテ赤引ヲ買入レヌ故惡シ
ト言フノ意ナランカ明治十二年ノ統計ニヨレハ上州全國ニテハ拾九
萬斤ノ絲ヲ製スルモ富岡製絲所ニテハ僅ニ其中二萬斤ナリ何ソ富岡一
ヶ所ノタメニ繭ノ良否ヲ云フニ足ランヤ且ツ富岡ハ官立ニテ年々餘程
ノ損耗ヲ成ス而已併シ佛國送リハ絲ノ細キヲ要スル故小石丸ヲ好ムト

雖モ他ノ製絲家ハ多ク米國ニ賣リ込ムカ故「テドル」十七八位ノ大口ニ
テ宜シ故ニ是ヲ全國ニ概論セハ赤引ノ方良カルヘシ

原澤傳太郎 赤引ノ失ヲ云フニ第一ニ虫弱ナリ次ニ桑ヲ多ク食スルノ二
點ヲ厭フト雖モ虫ノ弱ナルハ飼養熟練ニ至ラハ是ヲ恐ル、ニ足ラス又
桑ヲ多ク食スルハ其形チ大ナルカ故ナリ畢竟桑ハ絲ト相交換スヘキ者
ナレハ敢テ桑ヲ惜ムニ及ハス且ツ試ニ一粒ヲ解舒セシニ絲ノ回數小石
丸ト比スレハ殆ント二百有餘回ノ多キアリ從テ「テニール」ノ多キハ論
チ俟タス又當時飼養ノ說ヲ舉レハ福島縣下伊達郡長野縣下伊奈郡當縣
下西群馬郡ヨリ本郡ニ至ルモ皆有名家ノ飼養スルハ赤引ナリ果シテ然
ラハ赤引ヲ以テ最モ利益ノ大ナルモノト信ス

會長加藤義質 論旨モ盡タリト認ム因テ第五條問題ヲ朗讀セシム

第五條發蠶ノ季俟早晚ニヨリ得失如何

山崎六三郎 早キニ得アリ晚キニ害アリトス之レ後ルレハ暑氣酷シキニ

至ル迄之ヲ飼養セサルヲ得ス寒キハ之レヲ凌クニ火力ヲ用ユレハ可ナ
リ酷暑ニ至テハ或ハ種々之ヲ豫防スレ共甚タ堪ヘ難ケレハナリ且ツ養
蠶ハ農業ノ一大部分ニシテ讒ノ日數ニテ大金ヲ得ルモノ故之ヲ農業中
ノ第一ニ置クモ可ナリ然レトモ若シ後ルレハ田植麥刈等ニ差合フ故何
レカ粗ニセサルヲ得ス其力爲メ終ニ兩全ヲ得ス因テ思フニ寧ロ早キニ
失スルモ晚キニ失スル勿レト

須藤光三 生ハ嘗今陳述セラル、所ノ山崎君ト大ニ同意ナリ夫レ蠶ノ發
生スル時ハ如何ナル時ソヤ春陽晴々トシテ百穀ヲ播シ一年ノ經濟ヲ計
リ農家ノ一日モ忽ニスヘカラサル時ナリ若シ此時ニシテ事機ヲ失セハ
一年ノ經濟ヲ失フニ至ル豈慎マサル可シヤ夫レ養蠶ハ農ノ爲ニシテ各
自經濟ノ機ナリ然ラハ農事未タ繁忙ナラサル前ニ百穀ヲ播シ悉ク一年
經濟ノ本ヲ立而シテ蠶事ヲ濟シ前ニ播セシ百穀ヲ培養シ且ツ耕シ且耘
ルコソ順ナルニ若シ發蠶ヲ晚クシ前播シアル百穀種々植物ノ培養耕作

ノ事機ヲ失ヒ終ニ一年ノ經濟ヲ過ツニ至ラハ養蠶ニ聊所得アリト雖モ
何ソ前件ノ失ヲ補フニ足ンヤ晚キニ失センヨリ寧ロ早キニ失セヨト山
崎君ト同意ヲ陳スル所以ナリ

深津友次郎 早キ時ハ桑芽或ハ木皮ヲ削リ養フヘケレ共夫ニテハ害アリ
養蠶ハ農家第一ノモノナレハ少シ後レテ麥刈等ニ障ルトモ些少ノコナ
リ生ハ桑ヲ充分發芽セシメテ後發生セシムルヲ可トス

松下政右衛門 小生ノ經驗ニテハ養蠶ハ早キニ利有可シ地方ノ氣候ニ應
シ通常ノ發蠶ヨリ少シク早キヲ目的トシテ之ヲ掃立レハ繭ノ目方強キ
ヲ疑ヒナシ又晚キ發生ナレハ三眠迄ハ進ミヨクシテ頭數モ減スルコナ
シ併シ日々ニ暑強ク桑剛クナリテ終ニ病ヲ發ス此晚キ病ハ八九分頭ノ
アカルク成ル病ナリ結局晚キニ害有ルモノナレハ早キ發蠶ニ利益アル
モノト認ム希クハ諸君ノ名説ヲ仰カン

桑島謙太郎 本題ハ本年ノ如ク季侯ノ遅ル、ト或ハ進ミシトニ因テ得失

ヲ論スルモノナレハ論シタリトテ徒ニ光陰ヲ費スノミト思ヒシニ巳ニ
 説明モアリタレハ爰ニ於テ聊カ意見ヲ陳述スヘシ夫レ發生ノ遅ルト
 早キトノ得失ハ早ヨリ遅キヲ得アリト云可シト雖モ一概ニ論スル能ハ
 サルモノハ其目的ニ依レハナリ若シ其目的製糸繭ニ在レハ早キヨリ遅
 キヲ得アリト云可シ如何トナレハ遅ケレハ桑葉ノ成長モ全キカ爲メニ
 共ニ三百貫ツ、ノ桑葉ヲ要スルモノトスルモ早キモノハ其畑一反五畝
 ヲ要シ遅キモノハ一反ニシテ足ルカ故其一年間ノ手入ヨリ算テ立レハ
 遂ニ些少ニ非サル利アルハ余カ言ヲ待タスシテ明カナレハナリ然シテ
 遅キニ過キントスルキハ飼養中ノ注意ヲ以テ三四日位ハ成繭迄ノ日數
 ヲ縮ムルモ左程ノ支モナク又難キコトモ非ス若シ其目的種繭ト成スノ
 見込ナレハ或ハ部方ノ障モアレハ遅キヨリ寧ロ早キ是トス併シ桑量ハ
 幾分ノ多量ヲ要スルモノナリ

榑淵作右衛門 早キ方宜シト云フハ半夏生繭ニ揚ケ終ラテハ終ニ暑氣ノ

爲メ或ハ病ヲ生シ易ク且繭モ宜シカラサレハナリ

木村政太郎 小生ハ山崎君ノ説ヲ賛成ナリ中ニハ晚キヲ以テ可トスヘシ
 晚桑ヲ與フレハ糸ト成テ量ヲ増ストカ云論者モ有タレ共余リ晚ク桑ヲ
 刈リ取ル時ハ來年ニ至テ其梢伸ヒス爲メニ桑ニ減額ヲ生スヘシ又晚桑
 ノ剛キヲ與フレハ必ス上品ハ探レサルモノナリ猶又養蠶モ農事ナレハ
 先ツ麥刈田植等ハ指置テ利益ノ大ナル養蠶ニ專ラ從事スヘシト述ヘラ
 レタルモ同時ニ是ヲナスモノナレハ利益ノ多キヲ專一ニスヘキハ當然
 ナリト雖モ養蠶時侯ト農繁時侯ト其間少ク差アルナリ故ニ松下君ノ説
 ノ如ク餘リ早過キテ桑ノ芽ノ未タ出サル時分ノ發生ニアラサレハ可成
 早キヲ可トシ養蠶モ外農事ニツナカラ充分手ノ届ク様致シタキモノ
 ナリ

深津友次郎 反對論ナレ共半夏生ニカ、ルノ惡キハ諸君モ知ル所ナリ半
 夏迄何日ト目的ヲ立置ケハ大事ナシ又四十日懸ルモノヲ三十五日ニ飼

上レハ手數モ省キ繭ノ爲メニモ宜シ敢テ發生ヲ早メサルモ飼養手當ヲ充分ニシ日數ヲ縮ムレハ害ナシ前説ヲ補演ス

倉澤金次郎 予カ想像スル處ハ早晚共ニ利ナシトス如何トナレハ早キハ冷氣強ク養桑モ發芽シ難ク且成繭迄ノ桑量幾許ト無ク費シ又晚キハ暖氣多ク且ツ養桑モ入梅ノ水氣ヲ含ミアレハ蠶ニ濕氣ヲ受ケ遂ニ蠶病ノ基タルヘシ尤モ桑葉發芽ヨリ十日ヲ過キタルヲ蠶兒發生ノ良期トス桑島留治 早キニ限ルナリ糸ノ質ハ多ク養桑ニアルモノナレハ入梅ニカ、ルキハ桑ノゴム質ノ薄クナル故糸モ宜シカラス入梅四五日前成繭スル様致スヘシ

今井惣作 早キ發生ヲ必ス良ト思ハル中ニハ遅キヲ良シトスト云フ人アレ共本年度ノ如キハ昨年度ノ收穫ニ比スレハ一般幾分カ及ハサルモノト見ユ之レ則チ晚蠶ナルニヨルヘシ然ラハ本郡ノ如キハ半夏生前兩三日位迄ニ上簇スルヲ宜トス

會長加藤義質 論旨既ニ盡タリト認ム且ツ時間モ餘程移リタレハ本日ハ之レニテ退場スヘシ明日一日々延テ願ヒタレハ會員參會アルヘシ時ニ午後七時二十分

九月十七日午前第十時開會

桑島謙太郎建議 生儀熟ラ考フルニ全問題廿六條ノ内昨十六日漸ク五條ヲ終ル此分ニテハ到底殘問題ヲ今日ニ盡ク了ルハ難カルヘシ或ハ之ヲ明日ニ延スヲ得ルモ爲メニ亦支障ヲ生スルヲモアルヘク左スレハ其終ヲシテ不完全ノ思アラシムルヲモアラン歟ト想像スレハ此會ヲシテ始終ヲ全フシ一ハ發起諸君ノ満足ヲ得一ハ我々モ亦遺憾ナキヲ欲スルニハ殘餘ノ條中最緊要ナルヲ撰ミ順次更正刪除シテ是非ニ今日結了致シ度若餘間アラハ殘ル問題ニ掛ルモ亦可ナリ諸君此議賛成アラントテ望ム

山崎六三郎 小生モ桑島君ト感テ同クスルノ一人ニテ是非ニ此建議ヲ容

レラレンコヲ欲ス若シ今日之ヲ終ラサレハ或ハ爲ニ言可ラサル嘆慨ヲ
生スルコトモアラシカ併此問題中一モ惡シト云フニ非ス只止ムヲ得サレ
ハナリ

會長加藤義質 之ヲ發起者ニ質スベシ且曰ク建議ノ意極メテ良シ本日ハ
之レ一日ノ口延ヲ願ヒテ此會ヲ組續スルモ又々明日マテ延期スルハ種
々差支ヲ生スヘキ掛念モアレハ必ス建議ヲ容レ度モノナリ

内海彌平治 小生モ發起者ノ一人ニテ此事ハ實ニ心痛致シ居タリ幸ニ建
議者ノアルアレハ此建議ニ從フヘシ併シ發起者一同ヘ一度謀ルヘシト
即之ヲ謀ルニ異議ナシ依テ此建議ヲ容レンコトヲ答フ

會長加藤義質 諸君ヨ只今問題刪除ノ建議起リテ之ヲ發起者ニ質セシニ
發起者之ヲ可トスルヲ以テ問題刪除ニ懸ルヘシ最モ桑島氏ノ建議ナレ
ハ同氏ヲ直ニ修正委員トセン即チ之ヲ桑島氏ニ命ス全氏修正問題ヲ朗
讀ス會長之ヲ衆員ニ謀リ多數ヲ以テ修正說ニ決ス則チ左ノ如シ

第六條桑ヲ害スル虫ノ原因並豫防ノコト

第七條蠶室ノ適否

第八條養蠶器具ノコト

第九條温暖育ト清凉育ト難易及利害得失如何

第十條掃立方ノコト

第十一條病蠶ノ主ナル原因及豫防ノコト

第十二條引蠶ノ老若利害如何

第十三條種繭育絲繭育養桑區別如何

第十四條成繭後手當如何

第十五條原種製造及發生多少ノコト

第十六條生絲類ヲ生スル原因

引續キ書記ヲシテ第九條問題ヲ朗讀セシム
第九條桑ヲ害スル虫ノ原因並豫防ノコト

桑島謙太郎

本題ニ付先ツ其虫ノ一二ヲ云ハンニ尺取虫

岩代地方ニ批把虫ト云ヒ武藏地方ニ桑喰

虫ト云フ)毛虫根切虫ナトアリ何レモ其原因ハ秋ノ氣候ニ依テ生シ冬ノ氣候依テ存シ春ノ氣候ニ依テ長育スルヲ論ヲ待タス然シテ之ヲ豫防スルニ尺取虫毛虫ノ類ハ秋落葉ノ后枝條ヲ束テ置ケハ幾分ノ豫防ヲ得冬ハ寒氣落葉ノ間ニ屯スル虫ノ族ニ染ミ渡ル様注意セハ大方ハ生存シ得サルモノナリ然ルニ尙春ニ至リ之カ成育スルヲ見レハ狭ノ類ヲ以テ切斷スルカ或ハ拾フニ止マルノミ又根切虫ハ其原因蟬ナリト云故ニ之モ少ク注意シテ可ナリ其他三河尾張地方ヨリ中國九州邊ニハ當地方ノ如キ大木ナシソハ一種毛切虫ト云虫ニ似ルモノ有根切虫有幹枝ニ穴ヲ穿チテ枯ラスモノアリ殆ント防クノ策ナキニ似タリ亦此地方ニモ桑虱ト稱スル虫アリ之ハ先ツ其虫ヲ落シテ培養セハ可ナルモノ多シ

今井惣作 尺取虫或ハ毛虫何レモ桑ニ大害ヲナス虫ナリ清明ノ頃ヨリ出テ桑ノ芽少シク生スルヲ食ヒ終ニ其木ヲ枯ラサシム又他ノ木ニ移リテ

斯ノ如ク大害ヲナセリ此豫防タルヤ拾ヒ取ルニ如クナシ然レモ桑ノ枝ヲ束チタル中ニ落葉止リ其葉中ニ害虫潛ミテ寒ヲ凌クモノナレハ寒甚シキ際之ヲ雪上ニ取捨ツヘシ然ル時ハ盡ク害虫ノ死スルモノナリ

原澤傳太郎 桑ニ一種ノ虫害アリ桑虱ト云フ此桑虱ノ付タル時ハ藁等ヲ以摺リ落スヘシ自然枯損ノ害ヲ除ク可シト考フ

内海彌平治 本案ニ付テハ諸賢ノ説ニヨリテ粗之ヲ知ルヲ得タリ小生ハ唯ニ見聞スル處ニテ一種ノ害虫ノ生スル原因ヲ述ヘン或養蠶家ニ二反歩餘リノ桑園アリ本年夥シク害虫ヲ生セリ其原因ヲ問ヘハ肥料ヨリ生スルモノト想像ス如何トナレハ其肥料タルヤ斃馬ノ肉ヲ肥シ溜メニ入レ水ニ和シテ熟スルヲ待テ肥料トスルヲ三ケ年間ニ及フ然ルニ本年ニ至リ此害虫ヲ生シ菊取後ノ新芽ヲ喰ヒ桑樹已ニ枯レントスルノ景狀ナルモ土用頃ニ至リ死シタルカ退タルカ盡ク撲滅セリ之ヲ豫防スルニ取盡ス能ハス該虫ノ形狀ハ黑色ニシテ恰モ山椒粒ヲ割タルニ似タリ該虫

ノ原因タル肥料度ニ過キ土質ノ變シタルヨリ生スルモノト想像スルモ未タ其豫防法ヲ知ラス本日集會ノ諸君ヨリ希クハ其說ヲ聞クヲ望ム
 深津友次郎 桑園ニ多ク赤クハト云一種ノ害アリ其儘蠶ニ與ヘテ害アリヤ否ヤ承リタシ此地方ニ於テ此虫ノ付カヌ木ハナキ程ナリ
 原澤佐四郎 本題ニ付テ少シク意見ヲ述ン桑ヲ害スル虫種々アリト雖モ吾沼田地方ニテハ已ニ諸君モ知ラル、通り尺蠖アリ該虫ハ半夏ノ頃ヨリ桑ノ梢ニ居リナカラ死シテ堅クナリ色黒クナリ而シテ該虫ノ全體ヨリ小蛆生シ恰モ蚊ノ如クナル羽虫ニ化シテ卵ヲ桑ノ葉及枝梗ニ産附シ氣侯ニ隨ヒ若干日ヲ隔テ彼ノ虫卵化シ虫成長ス此尺蠖ノ害ヲ免レントスル豫防一ハ桑葉桑樹ノ枝梗ニ着目シテ虫卵ヲ磨滅シ而シテ殘リ分ハ秋ニ至リ桑園ノ耕シテ桑葉不殘落ツルヲ待テ悉皆桑ノ落葉見ヌ様ニ深ク掘埋メルキハ翌年ニ至リ彼ノ尺蠖ノ害實ニ鮮少セリ而シテ万一殘ル尺蠖アルキハ桑ノ枝ニ居ルヲ其儘鋏ミテ以テハサミ切ルキ尤可ナリト

又俗ニ桑虱ト稱スル一種ノ虫アリ此虫付クヤ否ヤ桑ノ勢力甚ダ衰ヘ加之終ニ枯ル、ニ及フ其虫ノ發スル原因ハ何ソヤ則テ多クハ肥養ノ不足ヨリ生ス故ニ爰ニ注意スルコソ一ノ補助ナリ然レトモ此害ニ罹リシ后ニ豫防スルヨリ寧ロ其前ニ注意スルコソ肝要ナリ又此木ノ根ヲ掘テ見ルニ根ノ色紫且長者痿ノ如キ玉ナトアルモアレ共是等ノ如キモノハ掘リ出シ新タニ上等苗ヲ植替ルヲ以テ第一緊要トス其他豫防經驗スルニ効ナシ又白喰ヒト云フ一種ノ虫アリ之ヲ豫防スルニハ桑園ニ風入ノ宜シキ方法ヲ第一トス小生前件微衷ヲ述ヘテ以テ滿場諸君ノ參考ニ供ス因テ尙希クハ諸君ノ明說ヲ乞フ
 中島源兵衛 白クヒ赤クヒニ至テハ防キ方ナシ風入惡キ所ニ多ク生スルモノナレハ並木ナレハ一竝木置キニ抜キ刈リニ致セハ幾分カ減スルナリ聊手數ナレ共其効アルヘシ
 杉木彦七 所謂尺蠖虫ハ桑ヲ刈リ取ル頃蛾ニ化シ何レヘカ卵粒ヲ産ミ付

彼岸ノ頃發生シ葉ニ付テ落ルモアリ木ニ止ルモアリ而シテ春分ニ至リ
現出シ害ヲ成スモノナレハ最注意スヘシ之レヲ防クニハ落葉前束ヲ置
タル枝ヲ手ニテユキ取り土中へ深く埋レハ一ハ以テ肥料ヲ助ケ且該虫
ハ必ス撲滅スルモノナリ

松下政右衛門 桑島君ノ説ヲ賛成ス限テ此原因ト云フハ知リ難シ桑虱ハ
肥料少キニヨルト思考ス

西川泰吉 概畧虫ノ發生スル原因ハ肥料ニヨルナルヘシ麥稾等ヲ積置時
ハ根切り虫其他種々ノ虫ヲ生ス然ルニ麥稾其他草ヲ多ク肥料トス
ル故害虫ヲ生シ或ハ立枯トナルモノアリ依テ分子力ノ多キ物ヲ以テ肥
料トスルハ此害ヲ免ルヘシ

原澤萬次郎 桑虱ハ必ス熱氣濕氣ヨリ生ス地ノ深キ所ニハ生セス明俵ヲ
以テ擦スル説モアレトモ是ハ格別ノ効ナシ畢竟根ニ病ヲ生シ遂ニ枝條
ニ顯ハルモノナレハ其根ヲ掘リ黒ミノ入りシ根ヲ伐取り其場ニ肥料

ヲ用井埋メ置キ虱ノ附シ幹ヲ土際ヨリ皮ノ剥サル様ニ伐置ケハ新芽大
ニ生シ木ヲ植替ルニ及ハスシテ一ケ年ノ間ニ成木スルモノナリ

會長加藤義質 論旨盡タリト認ム次項ニ移ルヘシト書記ヲシテ第七條間
題ヲ朗讀セシム

第七條蠶室ノ適否

松下政右衛門 蠶室ハ其土地ニヨリ各異ナルト雖モ先ツ辰己向キヲ可ト
ス而新築スルナレハ十分風ノ入ル様ニシ日ニ向ク方ヲタテ切り空氣充
分ニ流通スル様ニ致シタシ

内海彌平治 松下君ノ説ニ辰己向ヲヨシトセラル尤モ風土ノ模様ニヨリ
山川ノ形狀ニヨルモノナレ共先ツ拙者ハ南向ヲヨシトス蠶室ヲ新タニ
設ケハ先四間八間ヲ長トス而シテ真中ニ仕切ヲナシ尤モ樹ケハツシニ
便利ナル様ニナシ置クベシ是ハ火力ヲ用ヒ且ツ暖氣ノ節空氣ノ流通ヨ
キ様ニスルノ手當ナリ蠶ノ飼養ニ至テハ休ミ起一様ナラス老蠶且眠ミ

等ニハ暖ニ注意シ盛りニハ清涼ニ注意スルニ火力ヲ用ヒ或ハ清涼ト區別シ飼養スルノ際ニ至テハ真中ニ仕切アルヲヨシトス屋根ハ茅葺板葺ノ區別アルモ先茅葺ニハ檜ヲ大キク上ケ板葺ニハ屋根ヨリ寒暑ノ侵スヲアレハ天井ヲ張りテ上ケ板ヲナシ置キ寒暖ニ隨テ開閉シ空氣ノ流通ヨキ様ニスルノ注意ニ付尙屋根上ニ檜ヲ設ケルヲヨシト心得ルナリ猶蠶室狹キハ大ニスルモ一間ノ廣狹ハ此振合ニスルヲヨシトス

桑島謙太郎 二三ノ説アリテ各可然ナレ共生ハ在來ノ儘ニテ適否ヲ述フ山川ノ狀況土地ノ風土ニ依リ各地差アリ濕地ニハ椽ノ下へ糶糠ヲ敷且風ノ流通スル様ニスヘシ寒ハ火力ヲ用ヒテ之ヲ防ク可ク暑ハ住居ノ仕切窓ヲ外シ風ヲ入ルヘシ尙防キ難キハ五寸許ノ箆或ハ竹ヲハス切ニシ屋根ノ間ニ挟ミ風氣ヲ通スヘシ瓦屋ナレハ生木ノ枝ヲ置クヘシ板屋ナレハ棚ノ上ニキレ或ハ筵ヲ張りテ日光ヲ遠サクヘシ然スレハ此月夜野地方ハ奥州掛田ノ地ニ似ダレハ劣ラヌ良繭ヲ得ヘシ

官川新兵衛 蠶室ハ南向ヲヨシト考フ地方ニヨリコバ飼二階ニシテ温暖ナル方可然東へ窓戸ヲ設ケ朝日ヲ受ケ夜中ノ濕氣ヲ拂フヘシ

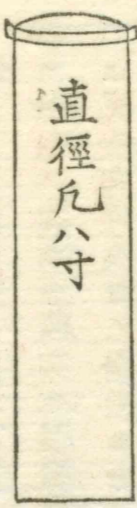
山崎六三郎 土地ニヨリ東南ニ山ヲ負ヘル所ハ南向ニ建ル能ハス在來ノ室ハ桑島君ノ説ノ通り萬一新築ナサハ西ノ方ハ樹木ヲ植テ防クヘシ二階アルヲ良トス

杉木彦七 此題ニ就テハ山崎氏ト同意ナリ又濕ヲ除カン爲メ糶糠ヲ敷クヲ真ニ大賛成併シ小生モ少ク心得アリ之ヲ舖クモ少シニテハ益ナカル可シ之ヲ多分ニ用ヒルハ容易ノコトニ非ス又石灰ヲ用コルモ可ナルヘケレト之亦費用ノ點ニ至テハ多分ヲ要ス可ク故ニ其簡便ニシテ費用ヲ省カンニハ其屋ノ椽ノ下ヲ掃除シ其鹽硝ヲ除去シ空氣ノ流通サヘ克クスレハ糠ヲ用ユルニモ及フマシ又霖雨等ニテ濕氣甚シキハ椽ノ下中央ニ深ク室ヲ堀リ炭火ノ上へ松ノ鋸屑ヲ掛ケ置キ濕氣ヲ除クノ一策ヲ設クルヲ良トス此法ハ當年現ニ我吳桃社中ノ林六郎平ナル者モ實行シ大

ニ効驗ヲ顯ハシタリ

工藤傳五郎 濕氣ヲ除ク方法ハ靱糠ヲ入鹽硝ヲ取ルノ説アレ共長濕ナル時ハ穴室ヲ穿リ其中へ火ヲ入松ノ鋸屑ヲ置キ煙ヲ廻ラスレハ濕氣ヲ去ルヘシ

山崎六三郎 嘗テ之ヲ桑島氏ニ聞ケリ如圖燒物ニテ作りタル者ヲ椽ノ下ニ埋メ夫ヨリ水ヲ注キ出スノ便トナ



底

スキハ永ク腐ルヲナク其家ノ建築ニ依テハ竹ナトニテハ無覺束物ノ如シ併是ハ此地方ニテハ曾テ見サレモ中

國及西京地方ニテハ用ユル者ヲ見タリ其燒方ハ俗ニ備前燒ト云フ物ニ等シ

會長加藤義質 論旨盡キタリト認ム時間ニ移リタリ依テ暫時休憩喫飯スヘシ時ニ正午十二時ナリ

午後一時着席書記ヲシテ第八條問題ヲ朗讀セシム

第八條養蠶器具ノ

内海彌平治 養蠶器具モ甚タ多キモノナレ共從來遣ヒ馴タル物ハ先置キ近來頻リニ蠶網桑切庖丁ノ使用物アリ是ハ近來流行ノ器機ニ付未ダ蠶網ヲ用サル地モアリ願クハ手數ヲ除クノ便易アルニヨリ一般ノ蠶家ニ之ヲ遣フ様ニ致シタシ又桑切庖丁ハ馴不馴ニヨリ得失有様ニ思モノアリ尤熟練ニモアレ共先庖丁ヲ製スニ稚蠶ノ時ハ小ノ庖丁ヲ用ヒ船休ミ頃ヨリハ中ノ庖丁ヲ用ユ則ケ壹尺二三寸ノモノ庭休ミヨリハ大庖丁壹尺五寸以上ノモノヲ良シトス此庖丁ノ遣ヒ方ハ尤手練ノ上其益アルヲ知ル依テ養蠶家ハ必ス求メ置テ使用セラレヘシ

山崎六三郎 養蠶ノ器具便利ナルモノ多クアレ共今新タニ求ムレハ費用モカ、リ在來ノ品ヲ取捨ルハ益ナキヲナレハ先在來ノ遣ヒ馴タル便利ノ品ヲ用ル方然ルヘシ

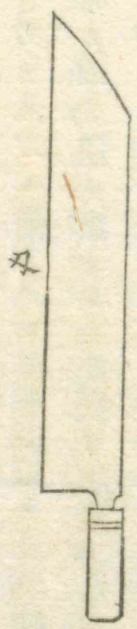
深津友次郎 籠ト云ハ當地ニテハ三尺ニ六尺ヲ用ユ大クシテ不便ナリ二尺七八寸ニ四尺位ニスレハ自由ナリ蠶室少シ狭クトモ二棚ニ用ヒラル二眠迄ノ處ヲ改正スヘシ火力ヲ用ユルニ大ニ利アリ網ハ便利ナレ共蠶室不適不注意ノモノニハ却テ害アルヘシ蠶下ヲ去ル時網ノ儘外籠ヘ移スニヨリ蠶ノ居所變ルコトナシ籠ノ中ト際トハ大ニ季候ニ別アリ因テ居所ヲ交換スルヲ良トス是網ニ害アリト云所以ナリ

松下政右衛門 器具在來ノ品ヲ捨ツルハ無益網ハ虫ノ動カサル故宜シカラストノ説アルニヨリ四眠後ノ説ヲ述フヘシ四眠後ハ繩アミ一枚カケノ網ヲ用ヒ兩人ニテ之ヲ扱フ其扱方ハ先ツ其蠶下ヲ去ラント欲スル所ノ棚ノ稍離レタル所ニ縱ニ幾枚モ蓆ヲ積置キ其採ル處ノ籠ヲ斜ニ棚ニ寄懸ケ一人網ノ上邊ヲ探リテ前積置キタル蓆ノ上ニ引落シ直ニ網ヲ振ヒ虫ヲ廣クル間ニ一人ハ舊ト在リシ蓆ヲ去リ兩人ニテ新タニ廣ケシ蓆ヲ籠ニ載セ元ノ棚ニ指ス斯ク爲セハ手數モ省ケ且ツ虫ノ居場モ日々異

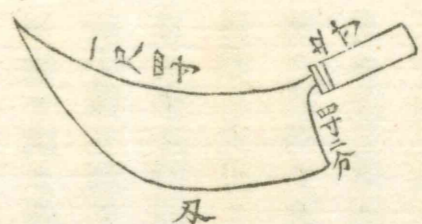
ナルモノナリ

桑島謙太郎 一言セン元ト蠶ノ病ハ手後レヨリ發ルモノナレハ之ヲ補フハ網ナリ併シ繩網ヲ用ユルヨリ今少シ便利ナリト思フハ竹ヲヒゴトシ一寸又ハ一寸五分位ノ目ヲ明ケ之ヲ用ユレハ極メテ便利ナルヘシ蠶座モ宜シ大ナルモヨシ上州地方ハ尺ヲ極メス蠶室ノ都合ニヨル深津君ノ説小籠モ利アルヘシ庖丁ノ柄長短ノ説又ハ三段ノ説モアレ共二様ニテ宜シ少々特別トモ云フヘキアリ刀脊ニ刃ヲ付タル様ナル製ニテ刀脊ハ弓形ニテ刃ノ方ハ直ナリ此分ハ二挺造リ兩手ニテ叩ケハ桑ヲ細クキザムニ便利ナリ尤婦女子ノ扱フ故ニ輕キヲ良シトス尤大切ニ至テハ大ナルモノヲ要スルナリ

其圖



杉木彦七 茲ニ庖丁新工夫ノ一種アリ圖ノ如ク庖丁ニ反リテ付ケ柄モ上



向ニスゲ積上ケタル桑ニノリカ、リテ突ク様ニ手元下ケ切ルヨリモ
 横柄ノ庖丁ニテ切ルヨリモカチ入ル、事少クシテ果敢取ナリ三眠ニ至
 リ切桑大分入用ノ期ニ至リナハ此柄ヲ二尺二寸ノ者（此柄ハ兼テ拵ヘ置ク者トス）ニスゲ替テ兩手ニテ切ルナリ桑切板三尺
 ニ五尺ノ上ニ兼テ五六貫目位ツ、ニ立置キタル桑ヲ三
 縫置又其上ニ段々積上ケ凡ソ三駄モギモ重子上ヨリ幅
 一尺七寸ニ縦八尺厚サ八寸ノ（如此コマチカ
 ケ前ト兩脇ニ出タル桑ヲ切落シコマチ取再ヒ其上ニカ
 ケコマノ角ナリニ切ルコ余カ新工夫ナリ

桑島留治 謙太郎君ノ説ノ如ク四眠ノ網ハ竹簧或ハ苧亮等ヲ用ヒ可然而
 シテ之ヲ編ムヨリ編マサル良シトス之レ抜キ取ルノ便アルヲ以テナリ
 又庖丁ノ柄ハ直ニシテ先ハ曲リ巾三寸五分長サ八寸位ノモノト三眠後
 ニ至リ長一尺六七寸巾五寸程組板ハ五尺ニ四尺五寸位ニスレハ桑二三

馱積ル其中へ串ヲ立一人ニテ廻リナカラ切ルキハ小切モ入ラス輕便ナ
 リ

桑島謙太郎 簀網ハ糸數五ヶ所ニシテヒゴノ間一寸位ニシテ編ズニ結フ
 ナリ其結ヒ方ハ毛ヲ結フ様ニシテ宜シ大小ハ籠ニ應シ一寸程ノ猶豫ヲ
 取レヘシ又桑ノ切方ハ桑ヲ踏ツケテカダメ上ヨリ竹木等ヲ差込ミ切ル
 キハ正角ニ切レルモノナリ或ハ豎ニ庖丁ヲ入レテ切ルキハ小切ヲ別段
 ニ要ス庖丁ハ刃先キノ丸キ故突込ム様ニ切ル方宜シ留治以ノ説ヲ補フ
 今井惣作 此桑ヲキサム庖丁ハ向ノ丸クシテ一尺五寸位柄二尺切板四尺
 長サ五尺此板ニ二寸位宛間ヲ置キ板ヲ立板ノ長サ一尺五寸ヨリ二尺ニ
 止ル此板ノ内ニ桑ヲ入レ上ニコマ板ヲノセ此上ニ自身登リ有此板ノ間
 ヲ切拂フ四眠起トナリ此間一本宛置ヲヌキ右ノ如ク切ルナリ二眠起ヨ
 リ用ヒテ尤辨利ト思ハル

深津友次郎 枝飼ノ仕方アリ是ハ信州上田ノ人中村佐一郎自飼養セシチ

聞クニ八尺位ノ竇高サ三尺位ニカキ付ケ長サ八間モアレハ原紙一椀位ノ蠶ハ飼ルナリ扱ヒ様ハ四眠後竇ノ上ニ飼枝ヲ並ヘ其上ヘ四眠後ノ蠶ヲ移シ尙葉ヲ與フルニハ刈桑ノ枝ノ儘其上ヘ並ヘ蠶ノ上ヘ上リタル時下ナル枝ヲ引拔キ捨ル蠶糞ハ自然竇ノ下ヘ落ル故ニムレカビ等ノ患ヒナクシテ蠶モ丈夫ニ育ツ如斯シテ老蠶ニナレハ枝ヲ十文字ニ與ヘ廻リニ豆壳ヲ少シ置キ其儘ニテ結繭セシム而シテ其光澤等ハ決シテ失ハサルモノナリト参考ノタメニ陳述ス

山崎六三郎 前説ノ殘リヲ補ヒタシ器具改良ハ最モ要用ナルモノナレ共猥リニ聞クニ任セ之ヲナスキハ却テ其舊器ヲ捨ルト新器ノ價ト及ヒ扱方ノ不慣トニ至テ損害ヲ受ク可シ凡器具ハ其用ヒ方ニヨリ便不便アリ熟練ナレハ便利ニ用ヒラル、モノナレハ極々便利ヲ認ムルノ外ハ從來ノ品ヲ用ユヘシ都テ習熟スルヲ第一トス

會長加藤義質 論旨モ盡ルト認メタリト依テ第九條問題ヲ朗讀セシム

第九條溫暖育ト清涼育ト難易及利害得失如何

木村政太郎 本題ハ養蠶重大ノ問題ニシテ種々ノ養法モ之ニ因テ生スルモノト思考ス而メ此溫暖育ト清涼育ト十分ノモノニ譬フレハ溫暖育ハ人造七分清涼育ハ天造七分位ニ居ルモノニシテ溫暖育ヲ難シトシ清涼育ヲ易シトス併シ良繭ヲ得ント欲スルニハ溫暖育ニ如クハナシト信ス然レ共今述フル如ク人造七分ニ居ルモノナレハ最モ注意ヲ精密ニ盡サ、ルヘカラス若シ誤テ之ヲ失スレハ其害タル清涼育ヨリ一層甚シカラント想像ス故ニ概シテ是ヲ云ヘハ精練家ハ溫暖育ヲ尤モ良シトス不精練家ハ清涼育ヲ誤チ少シトス然リト雖モ生等將來倣ハント欲スルモノハ溫暖育ナラサル可カラサルモノト確信スルナリ

桑島謙太郎 小生ハ溫暖飼コソ下手ナルモノ、飼法ニテ清涼育ハ精練ナラテハ及フマシト考フ其難易ヲ比較スルキハ清涼育ハ天造七分溫暖育ハ人造七分故ニ下手ナルモノニ成シ得ヘシ之レ天造物ハ人得テ容易ニ

變シ能ハサレハナリ利害得失ハ清涼育ハ自然ノ氣候故六ヶ敷溫暖育ハ
早ク上ル故利アリ得アリ清涼育ハ日數五十二三日モ懸ルヘシ左スレハ
凡ソ廿日モ差アレハ貴キ時日ヲ徒ニ消失スル、甚シキナリ或ハ清涼育
ハ後ル、故桑モ成長スルニ利アリトモ云フモノ有可シ併シ早ク切り採
レハ來陽ノ成長至テ宜シ反テ早キヲ利アリトス奥州地方ニテハ桑ノ芽
ハホグルレハ日方壹ツニ付壹分アリ三日モ立テハ五分トナル斯ノ如キ
模様ナレハ是非ニ溫暖育ニヨリ桑葉ノ堅剛ナラサル内ニ引上ケサル可
カラス該地ノ其飼法アル之レ天然ニ出シナリ而シテ常ニ其成功ハ奥州ヲ
第一トストノ評アルニ至ルヲ以テ之ヲ推スモ必セリ

松下政右衛門 桑島氏ノ説ニ賛成依テ一言スルハ無益ナレモ諸君喋々ト
清涼育ニ利アル説ヲ述ラル、ニ付テ發言ス清涼育ハ天然ノ氣候任セテ
レハ死シ次第生次第如何ニシテモ餘リ不深切ニテ馬鹿々々シク想像ス
極ヒノ注意ハ寒キキハ火力ヲ用ル當然ナリ反對論ト雖モ愚論ト思考ス

依テ簡短ニ溫暖ニ限リ利アル旨ヲ述フ

倉澤金次郎 本題ニ向テ我想像スル處溫暖育ニ利アリトス如何トナレハ
日數少クシテ諸費モ減少ナリ又發蠶ヨリ老蠶迄尤モ日數ヲ定メテ飼養
スルヲ自由ニシテ桑ヲ食スルモ進ミヨケレハ蠶ノ性至テ強シ故ニ溫暖
育ニ利アルヲ知ル然リト雖モ溫暖ノ爲メニ火力ヲ用ルヲ其度ニ過レ
ハ大ナル誤アリ依テ此ノ誤リナク溫氣ヲ作ルノ一器械アリ是ハ本年一
月愛媛縣ノ人佐々木某ト云究理學ノ先生我地方ニ來リ空氣交換ノ器ヲ
以テ火力ヲ用ルノ説アリ之ニ因テ生等二三ノ養蠶家ト謀リ該器械ヲ製
造シテ實檢スルニ果シテ効アリ其器左圖ノ如シ

筒廻り一尺位

烟筒ノ末ハ屋根ノ外へ出ス
丈ケハ長キ程ヨシ場所ノ都
合ニヨリ折曲ニ作テモヨシ

此處ヨリ繼ク但取置ノ便ニ供ス



右器械製造方ハ「ブリキ」ニテ作ル故ニ石油樽ヲ其儘繼セテ作ルヲ輕便トス故ニ代價モ凡ソ八拾錢位ニテ出來ルナリ是ヲ仕用スルハ蠶室ノ濕氣或ハ寒氣アル處ニ置キ其器ニテ火ヲ焚キ或ハ炭火ヲ置テ暖ムレハ自然器中へ水氣ヲ吸取リ煙筒ヨリ外へ出セハ室中へ新鮮ノ空氣交換流通スレハ室内ニ惡シキ氣ヲ止メシテ養蠶ノ爲メニ大ニ益アリ此器ヲ用ルニ當リ寒氣濕氣ノ多少ニヨリ微ナルキハ炭火ヲ用ヒ多キキハ焚火ヲ用ル方ヨロシ蠶家一般ニ火力ヲ用ルキニ當テハ焚火等ノ不注意ヨリ非

常ノ過チアラソクテ恐ル此器ヲ用ルニ至テハ其恐レナシ

深津友次郎 倉澤君ノ説ヲ賛成ス

今井惣作 温暖育ニ附テ少ク意見ヲ述ヘン温暖育ハ尤可ナリ實檢スルニ倉澤氏ハ煙ハ蠶ニ害有リト述ラレシカ必ス害ナシト想像ス室ニヨリ煙ルトト煙ヲサルアリ煙ヲサル室ニテハ必ス幾分カ濕氣ヲ生ス本年生試ミルニ新室ト舊室ト壹駄ノ薪ヲ燃クニ舊室ハ煙籠リテ暖ナリ新室ハ煙散シ易フシテ涼ナリ然ルキハ必シモ壁際杯ハ幾分カ濕氣ヲ生シ蠶ノ害トナリ同シ蠶ヲ養フニ煙ヲサル室ニテハ繭ノ收獲殆ント減セリ是ヲ以テ考フレハ煙ヲ止テ室ヲ暖ニシ養蠶スルコト利得ト想像ス

須藤光三 生モ本題ニ付聊カ陳述ス生ハ元ヨリ温暖育ヲ以テ利得アリト想像ス何トナレハ蠶ノ發生スルヤ春陽暖氣ノ時ニ至テ發生ス依之是ヲ觀レハ蠶ニ暖氣ノ適スルハ論ヲ俟タスシテ明ナリ亦清涼育ニモセヨ天氣暖ナルキハ蠶ノ桑ヲ喰ムト盛ナリ天氣涼ヲ催スキハ桑ヲ喰ムト鈍シ

然レハ暖氣ノ蠶ニ適スルヲ明ナリ由ニ適スル飼養ヲ施ス時ハ必ス良繭
ヲ得ラルヘシ然ラハ得アリ利アルハ明ナリ然シテ難易ヲ論セハ溫暖育
ヲ以テ難シトシ清涼育ヲ以テ易シトス何トナレハ天然ニヨラス人自ラ
溫暖ヲ作ルモノナレハ之レ難シトス聊カ想像スル所ヲ陳述スルノミ
深津友次郎 烟ハ害ナシト雖モ松ノ如キモノニ至テハ只和ヲカナルヲヨ
シトスル而已ニシテ其烟リハ上ヘ昇リキラス必ス下ルモノニテ器ニ水
ヲ入置カハオリノ溜ル位ナレハ自然ニ害ニナルト思ハル

木檜仙太郎 溫暖育ヲ以テ利得トス然レモ甚タ暖ニ過ルルハ却テ失敗ヲ
取リ安シ先華氏寒暖計ニテ七十度前後ヲ好トス自然ノ時候此邊ニ止ル
ルハ強テ火力ヲ用ユルニ及ハス若天寒フシテ將ニ六十度以下ニ降ラン
トスルルハ火力ヲ以テ豫メ之ヲ防クヘシ又不意ニ酷熱ニ至ルルモ少ク
火力ヲ用テ空氣ヲ動搖セシムヘシ奥州地方ニテ常ニ火力ヲ用テ時候ヲ
造ルハ決シテ慕フ可キモノニ非ス如何トナレハ余先年奥州安達信夫伊

達郡邊ヲ遊歴シテ有名ノ養蠶家ヲ訪ヒシハ伊達郡下手渡村佐藤五郎助
氏ニ就キ該地溫暖育ノ方法及其理由ヲ問ヒシニ同氏曰ク吾地方ニテ温
暖ノ必用ナル所以ハ唯朝夕寒暖ニ大差ヲ生シ氣候甚タ不順ナルヲ以テ
己ムヲ得ス火力ヲ以テ氣候ヲ造ルノミ然ラハ氣候不順ナラサル地方ニ
於テ故ヲニ之レヲ用ユルヲ要セスト此ニ於テ始テ彼ノ地ノ養蠶ニ艱難
ナルト吾上毛ノ養蠶ニ天賦ノ地ナルトヲ發明セリ而シテ目下蠶業ノ彼
ノ地ニ一步ヲ讓ルモノハ全ク吾勉強ノ足ラサルニ依ルト思考ス
會長加藤義質 論旨モ盡タリト認ム依テ第十條問題ヲ朗讀セシム

第十條掃立ノフ

原澤傳太郎 當年之ヲ試檢セシニ先ツ青ミヲ含ムル紙ニ包ミ七分以上發
生ノキ種ノ上ニ粟糠ヲカケ其上ニ桑ヲ振りカケ蠶ノ上リシキ箸ニテ裏
ヨリ打落スト又一法ハ粟糠計リテ樹ケ置蠶ノ上ルヲ待テ裏ヨリ打落ス
トノ二ツナリ然ルニ甲ノ粟糠ト桑トヲカケシ方ハ蠶ノ糠ニ登フ早シ乙

ノ粟糠計リヲ掛シ方ハ蠶ノ糠ニ登ルヲ遅シ之ヲ以テ之ヲ見レハ糠計リヨリハ桑ヲ用ル方ヲ宜ト想像ス

今井惣作 掃立ノ七種々ノ説アレト今原澤君ノ述ヘシ如ク蠶十分ニ發生シ掃立ント思フキハ種ノ上ニ粟糠ヲマキ直様桑ヲ糠ノ上ニ與フルヲ尤モ可ナリトス

山崎六三郎 原澤氏ノ説尤ナレ共糠ヲカケ桑ハ少シモカケサル方ヲ可トス之レ後レテ上リタル蠶ハ後レテ桑付ク故ニ桑ヲ用ユレハ自然不揃コナルノ恐レアレハナリ

桑島謙太郎 掃立ハ發生ノ目的ヲ定ムルヲ第一トス桑ノ芽ノ加減ニヨリ一周間或ハ十日前ニ定ムヘシ十頭モ發生スルヲ見テ種紙ヲ合セ時間ハ十一時頃ニ紙ニ包ミ翌日十二時頃掃ナリ華比寒暖計七十五六度位ニ掛ケ置ハ不殘發生スヘシ掃方ハ糠ヲ掛ケ桑ヲ能々モミホクシ與ヘ一度ニ打落スヘシ羽筈ハ水鳥ノ左リノ羽ヲ可トス 糲糠粟糠等ヲ用ユル説モア

レト余ハ糲糠計ヲ用ユ尤モ粟糠モ宜シカルヘケレモ糲糠ハ春クカ揉カスレハ柔ラカニナルモノナレハ糲糠ヲ良トス桑ノ古葉ヲ用ル説モアレモ是ハ掃立ル後桑ヲ與フレハ古葉ニ濕氣ヲ生スルニ因リ惡シ予モ此試驗ヲシ其失敗アルヲ知ル滿場ノ諸君ヨ此掃立方ハ爾後試驗ニ不及惡シキモノトスヘシ

桑島留吉 紙ニ包ムニ半付ナレハ二枚合セ丸付ナレハ一攸丈ヲ包ミ今日包メハ明日掃落ス發生三十分前桑ヲ切置午前十時ヨリ午後二時迄ヲ限リ掃立ヘシ殘リシ分ハ元ノ如ク包ミ置翌日ニ廻スヘシ粟糠ヲ用ル方然ルヘシ桑ハ始終前日ニ摘ミ措クヘシ

松下政右衛門 打落シ掃落シニ羽ヲ用ユレハ必ス痛ムモノナリ裏ヘ糸ヲ付置手掛ケニシ打落スニ目配シ壹打ニ落スヘシゴツ、ト幾打ニモ和ラカニ打ハ惡キナリ蠶ノウツカリシタル所ヲ打テバ落安シ若シゴツ、スルキハ取付テ如何ニスルトモ落サルモノナリ掃オロシハ庭ノ

上へ寒冷紗ヲ敷糶糠ヲ置打落シタル蠶ヲ能々カキ交セ振ホグシテ廣ケ置テ良トス

小林安太郎 小生等ノ實行セル處ハ發生十日モ前ヨリ華氏寒暖計七十二三度位ニシテ十頭或ハ二十頭位モ出ル處ヲ通常ノ紙ヲ八枚位繼立置キ其上ニ種ヲ置稗糠ヲ三十匁位掛ケ午前十一時ヨリ十二時迄ニ掃立ヘシ包ミシ後寒暖計七十五度位ヲ定度トス凡蠶兒ハ九分位發生シタルヲ見テ原紙ヲウツムキニシテ開キ種紙ヲユスリトリ其儘ニテ蠶量ヲ定ムメドナレハ三四十匁位桑ナレハ五十匁位一分四方位ニ細カニ切テ養置ナリ此養置キシ桑ノ乾キ加減ヲ見テ鳥ノ羽ニテ合セ蠶量壹匁ヲ尺坪二坪ヨリ三坪迄ニ廣ゲテ養フナリ

倉澤金次郎 發生ノ前日ニ桑ノ柔ラカナルヲ取置種紙ヲ糊ナキ紙ヲ四枚繼ニ包ミ置三ケ一モ發生ノ時午后一時頃桑ヲ悉ク細カニ切紙ノ上ニ振リ掛置三十分間過タルハ鴛鴦ノ羽ヲ以テ靜カニ掃落ス籠ハ棚ノ中央ニ

置キ糶糠ヲ一寸厚サ位ニ敷キ其上ニ紙ヲ敷キ其上ニ掃下スヲ宜シトス岡山歡太郎 掃立ハ其地方又ハ其人ニヨリ各異ナルト雖モ我地方ニ一良法アリ蠶ノ掃立ヲセント欲セハ先ツ蠶種ヲ溫暖ナル室ニ南向ノ障子ヲ去ルヲ凡九尺位ノ處ニ掛ケ置或ハ棚ニ置キ火力ヲ用テ溫暖ルヲ凡一周間位大抵梗桔色ニ變シ發生ヲ催スナリ而シテ朝二三頭モ發生スレハ其日ノ夕方發生セシ蠶ヲ悉ク掃捨テ蠶種ノ中央ニ細キ糸ヲ付ケ紙ニ包ミ中一日ヲ置キ三日目ニ至リ午前十二時掃立ルモノトス其掃立法ハ先ツ包ミシ蠶種ヲ廣ケ其上ニ極々細密ニ切りタル桑ヲ一面ニ掛ケ凡ソ五分間モ過キナハ種紙ヲ裏カヘシ中央ニ付シ糸ヲ持テ裏ニ廻リシ蠶ヲ羽箒ニテ掃下シ一尺二三寸ノ細キ竹ノ棒ヲ持テ裏ヨリ打降スヘシ尤モ桑ハ掃下シノ前日ニ摘置掃立ノ朝ヨリ桑拵ヘテナシ風ノ當ラサル處ニ置キ之ヲ輿フ而シテ掃下シ終レハ直チニ蕙ノ上ニ移シ廣ゲ糶糠ヲカケ桑ヲ輿フヘシ之レ生ノ第一良法ト認ムル所ナリ

原澤傳太郎 山崎君ノ桑ヲ與フレハ不揃ト云説ナレ共一度位與ヘタレハ
トテ苦シカララズ粟糠及ヒ桑ヲ用ル方爾然

富川新兵衛 從來經檢ニヨレハ八十八夜ニ二三日程後レテ掃落ス十日已
前ニ蠶ヲ掃除シ置華氏寒暖計七十二度ノ季候ニナシ或ハ青ミテ早メ
ント欲セハ障子際ニ寄セ掛ケ置彌青ミタレハ叔糠ヲ二寸位敷四枚繼ノ
紙ヲ置其上ニ種紙ヲ置四方ニ出サル爲メ周圍ニ少シ宛桑ヲ置午后一時
頃掃立桑ハ素ヨリ前日摘ミ取置ヲ用ユ原紙ハ兼テ裏ニ糸ヲ付置出揃ヲ
待テ桑ヲ振り與ヘ箸ニテ打落ス

會長加藤義質 論旨モ盡タリト認ム依テ第十一條問題ヲ朗讀セシム

第十一條蠶病ノ生ナル原因及豫防ノコ

倉澤金次郎 問題ニ向テ聊カ意見ヲ述ヘン我實驗スル處蠶病ノ第一ナル
モノハ黴菌病則「シヤリ」ニテ凡四眠後ニナルモノナリ故ニ養桑七八分
喰ヒ且手數モ多ク費シ既ニ宿繭ノ近キニ至リ斃蠶シ聊カ收穫ヲ見サル

モノナリ故ニ蠶病中第一ニシテ損害ノ甚シキモノナリ小生此災ニ罹リ
大ニ損失ヲ來セシフアリ故ニ其原因ト且豫防方ニ粗發明スル處アリ御
参考ノ爲メ之ヲ述ヘン第一此病ノ原因タル濕氣桑ムレ空氣閉塞不潔ヨ
リ生スルモノニシテ一室内ニ餘ル程ノ蠶ヲ込置キハ必ス蠶氣或ハ蠶下
ノムレニヨリ此病ヲ生スルモノト想像ス故ニ之ヲ豫防スルノ法ハ第一
火力ヲ用ヒ濕氣ヲ拂ヒ第二掃除第三蠶室ノ廻リ樹木無ラシメ第四蠶室
東西長ク南北狭ク光線ヲ受ルノ便平家ハ床ヲ高ク張ルヘシ第五原紙ヲ
減シテ扱方十分行届ク様ニスヘシ此豫防行届タルキハ該病ノ患無カル
ヘシ小生明治三年此病害ヲ生シタルハ目下ノ益ヲ計リ多量ノ蠶飼ニテ
大ニ失敗セリ翌年ニ至リ前陳ノ通り豫防ニ注意セシニ該病ノ災ナク果
シテ其効ヲ見タリ

桑島謙太郎 空氣ノ鬱閉ヤ濕氣ノ害ヨリ大ナル病アリ第一家内ノ不和合
第二他ヘ出テ長話シ第二「チヨボクレ」杯聞居ルヲ第四濕氣ムレ蠶病ノ

主ナル原因ナリ女子ノ經水或ハ死人ノ所へ行シナトハ敢テ害ナシ夫故ニ蠶ノ違ヒアル杯ト云ハ大ナル誤ナリ

松下政右衛門 蠶シヤリハ濕氣ヨリ起ル類多シ又空氣ノ流通ナキ室ニ起ル如何トナレハ空氣腐敗シ虫ノ體氣支ヘタルガ則蠶シヤリナリ此豫防ハ起リ場ヲ認メ二階ナレハ横窓ヲ少ク開キ蠶棚ノ下板ヲ抜キ放チサスレハ寒暖計少クハ降り度數ハ華氏六十五度ヨリ七十五度迄ニ限リアルモノト想像スレハ火力ヲ以テ右ノ度數ニ置ク時ハ必ス蠶シヤリノ豫防トナルヲ疑ヒナシ又明蠶ハ二種アリ蠶頭ノ赤クスクハ暑強キ中桑々附ノ時期後レタルヨリモ起ルアリ併シ溫氣籠ル室ニ多ケレハ空氣ノ循環ヲヨクシ溫氣ヲサマス時ハ右明蠶ノ病發スルヲナシ又薄明リノ透クアリ是ハ初眠ヨリ二眠迄ニ濕ヲ請タル蠶ニ暑氣或ハ火力ノ強過キタルヨリ起ルモノト信ス又節蠶ハ露桑ニテ飼ヒタル蠶ニ暑氣或ハ火力強ク蒸氣コモリタルヨリ發病ス右三種最モ重モナル蠶病ナレハ室ノ空氣連

動スルノ法ヲ設ケタシ左スレハ豫防ノ方法ハ則チコレナリ凡蠶病其他一切ノ豫防ハ始終油斷ナキチ第一ト想像ス

山崎六三郎 桑島君ノ說尤ナレモ尙一層ノ害アリ養蠶ハ國家ノ利益ヲ興ス爲杯ト不相富ノ慾心ヲ懷ク譬ヘハ夫婦暮シニテ二枚位掃立レハ宜シケレ共四五枚掃立等ニ至テハ實ニ手廻ラサルヨリ濕氣ムレ等ヲ防ニ道ナク勿論雇人ヲスルモ日當ヲ惜ミ十分ナラサルヨリ各其心ヲ以テ心トシ到底失敗ヲ引興スモノナリ之レ貪慾心ハ病源ノ第一ト云所以ナリ
深津友次郎 山崎君ノ說トハ反對ナリ慾ヲ離ルレハ養蠶ヲ致スニモ不及手ニ餘リ家ニ餘レハ病蠶ノ原因ナレモ第一養桑ノ與ヘ方ニ有ナリ人間モ食物ニヨリテ病根ヲ生スルモノナリ且并テ一言セシ其養桑ノ法モ種々アレトモ其時刻ハ豫メ之ヲ定メス只蠶ノ小ヨリチナシ桑ヲ探求スルノ模様ヲ見テ桑ヲ與ルチ尤良時刻トス

内海彌平治 病蠶ノ種類夥多ナレ共諸君ノ說ニ譲リ爰ニ實地試檢スル處

ノ一種蠶病ノ原因アリ茅屋根ノムレ嗅キニヨリ一夜ノ内ニ明蠶ニナル
 蠶病アリ小生曾テ蠶室ノ屋根替セシトキ春季ノ侯彼岸頃ニ茅替セシニ
 其茅ニ大ニ水腐アリシカ屋根ニ葺込ノ後ニ至リ嗅氣ヲ生セリ其邊ニ心
 付カス庭起後ノ蠶ヲ該室内ヘ送りタルニ一夜ニシテ蠶病ヲ生セリ該病
 タルヤ蠶棚中段以下ハ病蠶少ク中段以上ハ病蠶多キヲ以テ屋根ノ嗅氣
 ヨリシテ生スルノ病原ヲ知レリ其後五六年ニ至ルモ必ス其兆アリ依テ
 茅ムレノ嗅氣蠶ヲ害スルハ疑フ可カラサルナリ依テ小生ハ屋根ニ大樽
 ナ上ケ天井ヲ張テ該嗅氣ヲ避ントス今若手巾ニシテ未タ豫防ノ試驗ハ
 ナササレモ臨場ノ諸君屋根茅替ノトキハ注意シテ然ルヘキナリ

桑島留治 養桑ノ與ヘ方ニアリ殊ニ初眠ノ時攻メ桑ノ足サルヨリ種々ノ
 病源ト成可シ且蠶下ニ注意シ蠶下黒クシテ臭キハムレ氣アリ青クシテ
 桑ノ匂ヒアレハ宜シ

原澤傳太郎 第一恐ルヘキハ蠶シヤリナリ第二ニ明蠶ナリ治方ハ非スト
 雖モ豫防方ハ有者ト想像ス何トナレハ余カ本年飼養ニ付實驗アリ赤引
 小石丸ノ二種ヲ養フニ小石丸ハ先ニ熟蠶シテ巢入レニ及ヒ拾ヒ揚ケテ
 成スニ人員不足ナカラ著手スルニ折節炎氣甚タシ一方ノ赤引蠶裏抜キ
 後レシヨリ明蠶少ク見ヘシニ驚キ直チニ裏ヲ取り桑ヲ與ヘ而シ桑ヲ食
 シ終テ待テ又裏ヲ取り桑ヲ與ヘシカハ再治シテ良蠶ヲ成セリ是全ク手
 當ノ一ニアリト思考ス

宮川新兵衛 蠶シヤリハ唯順ト不順ト桑ノ不足ヨリ發ルヘシ華氏寒暖計
 七十度ニ定メ置時ハ病少モナカルヘシ夜ハ火力ヲ用ヒテ暖氣ヲ平均ニ
 スヘシ陽氣ト手當ト原紙ト適應セハ十分ナルヘシ養桑ハ枯方ヲ見テ與
 フヘシ

會長加藤義賢 論旨モ盡タリト認ム時間モ移リヌレハ暫時休憩スヘシト
 時ニ午後三時三十分
 午后四時五分着席書記ヲノ第十二條問題ヲ朗讀セシム

第十二條引蠶ノ老若利害如何

桑島謙太郎 本題モ又一概ニ論スル能ハサルモノ凡ニアリ一ハ其種類ニ因ル即赤引ノ類ハ老ニシテ可ナリ其他ハ多クハ若ニシテ可ナリトス二ハ種繭ノ見込ナレハ何品ヲ問ハス若キヨリ老ナルヲ可トス系繭ノ見込ナレハ老ナルヨリ寧ロ若キヲ是トスル者多キ敢テ余ノ喋々セスシテ知ル處ナリ其他寒暖ノ氣候ニ依テモ又幾分ノ加減アルモノナリ先ツ若ニモセヨ老ニモセヨ偏セヌ様注意スヘキハ要點ノ一ナレハ凡赤引ノ類ハ蠶糞三粒前後殘レル位ヲ度トス其他モ凡此邊ヲ目的トセハ可ナリ種ニモ系ニモ差支ナカルヘシ若シ系繭ノ見込ナレハトテ若キニ過レハ屑物多クシテ系量少ク系ニ力少シ又種繭ノ見込ナレハ迪老ニ過クレハ屑物モ多ク又繭ヲ成サ、ル物アルニ至ルヘシ

木檜仙太郎 引蠶ハ可成老熟セシムルヲ好シトスサスレハ系量ヲ得ル所ニ至テ格外ノ利益アルモノ也然ルヲ世ニ若蠶ノ繭ハ光澤善シト唱ヘ充

分熟セサル蠶ヲ上篋シテ過半中繭ヲ得ルモノアリ如此ハ世俗ニ所謂百日ノ說法放屁一箇ナルモノカ

桑島留治 種類ニモ季候ニモヨルヘシ若揚ケハ善シト雖モ熟セサル中ハ系ヨロシカラス老蠶ニ過クレハ繭不成種繭ハ糞二粒ヨリ一粒殘ルヲ良トス絲繭ニハ三粒四粒アル處ヲ上篋ノ良期トス

松下政右衛門 若揚ケハ良ト雖モ三日間過テモマフシニ上ラサル様ニテハ宜カラス年寄揚ケニ利益アルヘシ糞三粒アルハ二日間喰ヒ後レアルヘシ故ニゴム強キ故繭カタシ

岡山歡太郎 種絲ノ二種アリ先ツ種用ノ分ヲ言ハンニ諸物皆種トナルハ實ノ能ク入りシモノニアラサレハ用ヒサル也今蠶種ニ於テモ然リ故ニ種繭ノ分ハ十分ニ熟蠶ニナリシヲヨシトス又製絲ノ分ハ余リ熟セシハ反テ害アリ如何トナレハ繭ノ光澤惡ク其糸口太ク隨テ絲モ弱シ故ニ絲繭ノ分ハ蠶糞ノ三四粒殘ルヲ以テ適度トス若揚ノ甚タシキハ一籠ニ二

三ノ引蠶ヲ見ルルキハマブシニ打桑ヲホシ揚クルアリ甚タ害アリ又此打桑ハ蠶ノ十分食フ可キニ非スシテ反テマフシニ濕氣ヲ帶フ依テ此法ハ甚タ惡シ、

官川新兵衛 信州地方ハ種取多シ老揚ケヲ良トス蠶糞一粒位殘ルヲ度トス晩景ニ及ヘハ見分難キニヨリ糞ナキヲ拾フ氣ニテ成ス可シ赤引ハ赤ミチサス故ニ熟蠶ニ成リシト思ヒ若キヲ拾ヒ爲ニ失スルヲアリ因テ充分熟蠶トナリタルヲ宜シトス系繭ハ若キニアリ拾ヒ揚ケハ當地方ニテハ六ケ敷拾ヒ違ヒナキ様注意有タシ

深津友次郎 同シ一枚ノ籠中ニ老若不揃有ハ桑ノ與ヘ方不等故ト思ハル千頭或ハ八百頭ト分ケ置ケハ喰ヒ後レアルヘカラス厚薄ニヨラス同シ様ニ養桑スル故喰ヒ後レ等有也注意スヘキナリ

會長加藤義質 論旨モ盡タリト認ム依テ第十三條問題ヲ朗讀セシム
第十二條種繭育絲繭育養蠶區別如何

深津友次郎 種繭ト絲繭ト養桑大ニ區別アリ絲繭ハ何桑ニテモ宜シ種繭

ニハ可成肥料多キ桑ヲ用ユヘシ肥料少キ時ハ分落ルト云フ

官川新兵衛 信州ハ種場ナリ分方ノ有無ハ地味ニアルヘシ城下ト云フ所

元川ノ跡ナル故ニアクヲ流シ盡セシヨリ桑ヲ植テ成木セス纔ニ咫尺ヲ隔ル隣地ニテモ其地質大ニ相違ス是地味ニヨルナリ本場ノ桑ヲ用ユルキハ分モ七分ヨリ落ルコトナシ吾地方ニテ桑ノ能キ所ハ繭モ宜シ十分ノモノナレハ九分位肥料ヲ入ルヘシ繭ハ少シ落ケテモ肥アル桑ヲ良トス併シ肥料モ度アルナレハ尤注意スヘシ

會長加藤義質 論旨モ盡タリト認ム依テ第十四條問題ヲ朗讀セシム

第十四條成繭後ノ手當如何

山崎六三郎 種ヲ採ルヲ要トスルアリ自用ノ系ニスルアリ直ニ販賣スルモアリ種々其手當モ一樣ナラス先種取ニハ少シ遅ク搔キ取系繭ニハ少シ早クモ宜シトス繭ニテ販賣スルモノハ少シ相場ハ安クトモ早ク賣拂

フナ良トス相場ニヨリ販賣ナラサレハ燥殺スヘシ籠ノ儘ニテ殺シ棚ニ
差置サマセハタチ宜シト聞キタレモ到底常人ノ家ニテ成シ難シ故ニ如
何ナル方法ニテモ之ヲ燥殺スルニハ華氏寒暖計百三四十度位ニシテ充
分時間ヲ與フルヲ良トス此蛹ノ死シタルヲ見ルニハ其繭ノ最堅キ所ノ
モノヲ切蛹ヲ壓シ試ミルニ已ニ彈力ヲ失ヒタレハ死シタルモノトス可
シ而シテ之ヲ籠ニ並ヘ中ニ溝ヲ切り充分空氣ノ通スル様成置キ尙發蛆ノ
患濕氣ノ患アルキハ又々前同様ノ方法ヲ用ユヘシ貯方ニハ種々手數カ
、ル故少ク廉價ダリトモ早ク賣却スルヲ良ト思フナリ

松下政右衛門 利根郡第一等ノ上點ヲ取ル時ハ買人ニテ手富ヲ成スモノ
ナリ是ヲ第一ト思フ

深津友次郎 燥殺ヨリ蒸殺ノ方宜シト思ハル多ク飼フモノハ燥殺ニテモ
宜シト雖モ少シノ繭ヲ得ルモノハ小サク蒸籠ヲ作り蒸殺シノ方然ルヘ
シ方法ハ炭六升水四升ノ割合ヲ以テ多少ニ從ヒ凡テ釜ニ蓋ヲアテ湯氣

ノ直ニ當ラサル様注意スヘシ

杉木彦七 山崎君ノ説ヲ賛成スルニ付其意ヲ繼テ述ヘン貯方永キ時八十
分乾燥イタシ置ナリ目方極ル光澤解舒共ニ宜シ爰ニ一ツ注意スヘキコ
アリ目方減少セサル故乾上リト見込テモ十分ナラサレハ製絲家ニ取レ
ハ目方ノ見込違アルヘシ養蠶家能々注意アルヘシ

桑島謙太郎 成繭後ノ手富ハ上籾ノ後繭ノ形チナリタラハ下ヨリ風ヲ入
レ上ヘ抜クヘシ而シテ繭ヲ搔キオロシ之ヲ撰ミ燥殺蒸殺乾殺何レモ用
ユヘシ然レトモ燥殺ハ光澤ヲ失ス蒸殺ハ初メ蒸シ後火ニテ乾カスモノ
ナレハ余程堅ク成可シ又入梅ノ節ニ至リテハ蠶ヲ生シ製絲家ニ於テ大
ニ困難スルモノナリ故ニ燥殺ヲ第一トス搔取り直ニ籠四邊木ニテ作り篋
ヲ敷一籠八升或ハ
一斗入ニ入レ火力ヲ強クシテ凡二時間位ニ燥殺シ其繭ヲ一積ニシケ
ツト或ハ布團ヲ二重或ハ三重ニカケ凡一時間ヲ經テ空氣流通ノ宜キ
場ニ置日々ノ手富モ只サナキノ腐敗ヲ注意スル而已且ツ降雨ノ節濕氣

ヲ防クノ方法ヲ施スヘシ秋風立ハ袋ニ入仕舞フヘシ尤山崎君ノ説ノ如ク早ク賣ルヲ善トス

會長加藤義質 論旨モ盡タリト認ム依テ第十五條問題ヲ朗讀セシム

第十五條原種製造及發蛾多少鑒定ノ事

山崎六三郎 人ニヨリ繭ニ大小長短ノ好ミアリ赤引ハケ様小石丸ハケ様ト其元巢ヲ鑒定セスハ成マシ撰ミ方ニヨリ如何ニモ變スヘシ第一ナラ第二繭ノ形狀ヲ撰ミ而シ蛾或ハ蛆ノ見分ケヲナスニモ繭ヲ切斷シ中ナルサナギノ病ヲミテ之ヲ分ツモ疵アルハ蛆ト知ル可シ而シ其或ハ十ノ中無疵ノモノ六ツ以上ナレハ成丈ケ丁寧ニ直ニ籠ニナラヘ若以下ナレハ空ク繭ヲ害スルヲ以テ即チ一々其見分ヲナス其方暗室ニテ一方ノ戸ニ繭形ノ穴ヲ穿テ其穴ヨリ繭ヲ覗キ見ルキ赤ク見ユルヲ良トス青キ黒キハ蛆ナリト知ルヘシ只六分以上分アリト認ムルキハ其儘手ヲ入レヌヲ良トス之レ手ヲ入ル、ト分ノ落ルモノナレハナリ

桑島謙太郎 原種製造ニ供スル繭ノ撰ミ方ハチヅラ形ヲ撰フハ原ヨリ

ナリ併シチヅラハ次ナリ形ヲ先ニスヘシ繭少ク種ヲ多ク取ラントシ甚シキニ至テハ買上繭ニテサヘ探ルモノアリ所詮充分ノ撰ミハナシ能ハサルヘシ只々去年ノ形ヲト本年ノ形トヲ見競ヘテトルモノナリ發蛾鑒定ハ山崎君ノ説ノ如ク透シ見レハ分リ易シ此説第一ナリ

松下政右衛門 桑島君ノ説ヲ賛成ス

會長加藤義質 論旨モ盡タリト認ム依テ第十六條問題ヲ朗讀セシム

第十六條系類ヲ生スルノ原因

桑島謙太郎 生系ニ質類ヲ生スル原因ハ元巢撰別ノ宜シカラサルト地質或ハ大氣ノ模様ヨリ生スルモノナリ故ニ其地質又ハ大氣ノ模様ヲ知ラサレハ確言スル能ハス世間ノ人ノ云フ如ク山地ニ養ヘハ類多ク平地ニ養ヘハ少クシテ其証利根郡ト佐位那波兩郡邊トノ品ニ差異アル如シト雖モ此レ亦信スルニ足ラス其一証ヲ擧ケンニ岩代國掛田ハ山間ノ邑ニ

シテ山岐ノ園ナリト雖モ敢テ佐位那波地方ニ異ナルコトナシ全梁川地方ハ平行ナリト雖モ其類利根郡ニ比スヘシ是山畑平園ニ依ラサル一証ナリ又先ニハ質類多キモノヲ産スルモ追々減少スル地方少シトセス現ニ當所ノ如キハ其一ナリ地味モ氣候モ變化スルモノナリ嗚呼遺憾ナル哉其何ルヲ乎ヲ知ラサルハ

杉木彦七 桑島君ノ説ノ如クナレ共尤モ元巢ニヨルヘシ青白ニ多ク又チミラアラキニ多シト認メタリ小節ハ暑サノ爲メニ生スルカト想像ス何ントナレハ蠶ノ揚ルルキノ氣候非常ニ暑ケレハ糸ヲカダメテ吐出ス氣味アルニヨルヘシト思ヘリ

桑島留治 質類ノ原因ハ暑ト寒トニヨル又養桑土地ニモヨルヘシ寒キハ少シ扣ヘル故ニ其時ゴム固マルニヨリ類トナルカト思ハル

松下政右衛門 質類ト云フハ原因ニナシ是ハ種類ニ有ヘシ小粒ニ少ク大粒ニ多シ輪類ハゴムニモアルヘシ老揚ケニ多クシテ若揚ケニ少シサレ

トモ一概ニ論シカタシ

内海彌平治 建議アリ問題ノ説モ最早盡キシト見ユレハ今一題ヲ加ヘ度望ミアリ建議シテ可然ヤ

會長加藤義質 満場ノ會員ニ詢リ定ムヘシト只今建議ノ一問題ヲ容ルニ同意ノ者ハ起立セラレヨト起立過半数ニ因リ建議ヲ容ル、ニ決ス

會長加藤義質 建議者問題ヲ出スヘシト

内海彌平治 本會ノ問題ハ數條アリシカ修正ヲ以テ省略セシニヨリ其儘ニテ先ニ問題ヲ作りシキ過テ書落シタル條アリ其問題ヲ加ヘラレタシト之ヲ提出ス

會長加藤義質 書記ヲシテ之ヲ朗讀セシム

追 加

寒暑凌キ方并害物種類及豫防ノコト

山崎六三郎 寒暑凌キ方ニ至テハ温暖育清涼育ノ題或ハ蠶室ノ適否ノ問

題ニ就テ充分説アリ別ニ異議ナシ併シ寒ヲ凌クニハ火力ヲ用ユベク暑
ヲ凌クニハ種々アレモ板屋或ハ瓦屋ニテハ屋上ニ樹枝ヲ上ケ或ハ窓戸
ヲ明ケテ熱氣甚シキ方ニハ濕シ蓆ヲ掛ケ涼風ヲ入ルヘシ害物ハ鼠或ハ
蟻ナトノ害モアリ鼠ニハ猫ヲ飼置ハ可ナリ蟻ニハ棚ノ柱ヲ水ノ溜ルモ
ノ、中ニ立ルカ或ハ綱ヲ用ユル様ノ豫防ノ仕方ニテ防クアルヘシ其
他臭氣惡シキモノ又辛キモノヲ忌ムヘシ

木村政太郎 山崎君ノ説ノ通り第一鼠ナリ併此モノヤ何處ヨリ出ヤ分ラ
ス猫ヲ飼ヒ置テモ鼠ヲ取ラヌモアリ神佛ヲ祈ル者モアレモ方今開明ノ
代ニシテ如此事ヲ爲スハ怪ムヘシ研究モナケレハ諸君ノ説ヲ聞タシ吾
地方ニテハ蟻ノ害ハサホトモナシ羽虫ト云フ者アレトモ其害ハ少シ
松下政右衛門 寒ヲ凌クニハ火力ノ一點ニ限ルハ勿論然ルニ此火力ノ扱
ヒハ蠶ニ適スル寒暖ハ蠶病豫防ノ問題ニ述シ如ク華氏六十五度ヨリ七
十五度ノ間ニテ適度トスナレ共霖雨ノ爲メニ降ル寒暖ニ扱フヘキ火力

ト風ノ爲メニ降ル寒暖ハ一樣ニ扱フヘカラス如何トナレハ雨天ノ空氣
ハシメリアルモノナリ然ルニ天井ヲ張置又四方ノ圍ヲ能クシ空氣洩レ
サル様ニシテ火力ヲ七十度迄ニ扱フキハ其濕リアル空氣火力ノ爲メニ
蒸餾シ甚シキハ寒暖計露ヲ流シ決シテ乾カサルナリ此時ニ至レハ其蠶
九分九厘發病ス依テ雨天ノ火力、縱横ニ空氣少ク動ク口ヲ設ケ火力ヲ
扱フヘシ左スレハ虫進ミ能ク則ケ飼育ノ祕術ト想像ス又風荒クシテ寒
クナルキハ成丈圍ヒヲ能クシ火力ヲ扱ヘハ間違ヒナシ又其害物ニ至テ
ハ諸説アレ共迂生簡單ニ述フヘシ養蠶ニ第一ノ害物ハ飼主ノ大モノク
サ者情ノ惰飼ヲ即ケ害物ノ祖長ト認ム如何トナレハ諸君考テ見ヨ
内海彌平治 害物ハ鼠ト蟻トナレ共豫防法ニ難シトノ説アリ参考ノ爲メ
予カ經驗セシ處ヲ述フヘシ鼠ハ猫ヲ以テ防クト雖モ其猫情ニシテ鼠ヲ
不取歟又ハ其頃ニ至リ犬狐ニ猫ヲ取ラル、歟ニテ猫ナキキ之ヲ防クニ
ハ青麥ノ穂先キヲ火ニテ燒キ家ノ廻リ鼠ノ通ロヨキ處三四ヶ所ニモ置

ケハ鼠其麥ニ食ヒ付タル後ハ更ニ蠶ヲ食フコトナシ若シ麥ノ盡タルハ尚取替ヘシ蟻ノ付ハ外ヨリ道ヲ作りテ蠶棚ヘ通フモノナリ蟻ノ巢床下等ニテ知レサルハ防クモ難ケレトモ家ノ廻リ或ハ崩レ土等ノ所ニ巢窟アリテ通フト認ムルハ其廻リヲ堀リ穿テ熱湯ヲ掛テ撲滅スレハ更ニ蟻ノ通フコトナシ何レモ余カ此害ニ逢ヒ經驗セシ處ナリ

須藤光三 鼠ノ害ハ養蠶ノ頃室屋ヲ片付ルニ付食物ナキニ因リ蠶ヲ喰フコトアリ米麥ニテモ十分ニ食物ヲ與レハ蠶ニ付コトナシ内海君ノ説モ宜シ原澤萬治郎 第一蠶ニ害ヲナスハ鼠ナリ之ヲ防クニ猫ヲ用ルハ普通ノ説ナレトモ猫ニモ情ニシテ鼠ヲ捕ヘサルモアリ因テ是ノミ頼ニシテ大ニ損害ヲ蒙リシコト世間往々アリ小生モ先年斯ル場合ニ遭遇シ因テ種々愚按テメクラセシ末蛇ヲ家ノ内ニ入レシニ鼠ノ立去ルコト速ナリ又之ヲ何日モ飼置ントスルニハ白米ニ水油ヲ添ヘ鶏卵ト共ニ屋根ノ四方ニ置クトキハ蛇其家ヲ去ラスシテ鼠ノ害ヲ防クコト他物ノ及ハサル所ナリ我地

方ニテハ此蛇ヲ青大將ト云ヒ人家ノ近傍ニ多分ニ見ユ此物ヲ用ヒシヨリ鼠ノ害ヲ受ルコト一切無之ニヨリ參考ノタメニ實驗説ヲ述フ

深津友次郎 神佛ヲ祈ルハ開化ノ時節ナキコトハ云ヘモ爰ニ心ヲ寄スル人ハ自然其加護有モノナリ予ハ西群馬郡上白井ノ諏訪大明神ヲ祈リ猫ハ飼ハサレモ鼠ノ害ナシ

小野善兵衛 害物ノ種類甚タ多シト雖モ或人ノ説ニ馬兜鈴ヘクソカヅラ牡丹蔓センニンサウノ四種何レモ蔓草ニシテ田畔ナトニ生シ桑樹ニカラミ付ク者アリ若シ誤テ之ヲ桑葉ニ切交セ與ルハ勿論桑梢ニカラミ付タルヲ採捨テ其桑葉ヲ與フル如キモ頗ル害アリ己ニ是カ爲メニ大害ニ罹リシ者アリ云々ト云リ故ニ桑畑ノ畔ニ生シタラハ速ニ穿捨ルニ如カス桑島謙太郎 本案ハ溫暖育清涼育ノ條ニ述ヘシカ尙一二ヲ述ヘン寒キハ火力ヲ以テシ暑キハ屋根ニ水ヲ打ハ却テ惡シ、打ナラハ不絶流ル、程ニスヘシ之ヲ凌クハ午前日ノ出前ニ其緩ト嚴トヲ見定メ屋根ニ青

群馬県立図書館



0238143-2